

今昔物語

卷第24

特40

594

今昔物語集卷第廿四

本朝付世俗

- 北邊大臣長谷雄中納言語第一
- 高陽親王造人形立田中語第二
- 小野宮大饗九條大臣得打衣語第三
- 於爪上勁殿返男針返女語第四
- 百濟川成飛驒工挑語第五
- 碁擲寬蓮值碁擲女語第六
- 行典藥寮治病女語第七
- 女行醫師家治瘡逃語第八
- 嫁她女醫師治語第九

震旦僧長秀來此朝被任醫師語第十

忠明治值龍者語第十一

雅忠見人家指有瘡病語第十二

慈岳川人被追地神語第十三

天文博士弓削是雄占夢語第十四

賀茂忠行道傳子保憲語第十五

安倍晴明隨忠行習道語第十六

保憲晴明共占覆物語第十七

以陰陽術殺人語第十八

播磨國陰陽師智德法師語第十九

人妻成惡靈除其害陰陽師語第二十

僧登照相倒朱雀門語第廿一

俊平入道弟習算術語第廿二

源博雅朝臣行會坂盲許語第廿三

玄象琵琶為鬼被取語第廿四

三善清行宰相與紀長谷雄口論語第廿五

村上天皇與管原文時作詩給語第廿六

大江朝綱家尼直詩讀語第廿七

天神御製詩讀示人夢給語第廿八

藤原資業作詩義忠難語第廿九

藤原為時作詩任越前守語第三十

延喜御屏風伊勢御息所讀和歌語第卅一

敦忠中納言南殿櫻讀和歌語第卅二

公任大納言讀屏風和歌語第卅三

公任大納言於白川家讀和歌語第卅四

在原業平中將行東方讀和歌語第卅五

在原業平於右近馬場見女讀和歌語第卅六

藤原實方朝臣於陸奧國讀和歌語第卅七

藤原道信朝臣送父讀和歌語第卅八

藤原義孝朝臣死後讀和歌語第卅九

圓融院御葬送夜朝光卿讀和歌語第四十

一條院失給後上東門院讀和歌語第四十一

朱雀院女御失給後女房讀和歌語第四十二

土佐守紀實之子死讀和歌語第四十三

安倍仲實於唐讀和歌語第四十四

小野篁被流隱岐國時讀和歌語第四十五

於河原院歌讀共來讀和歌語第四十六

伊勢息所幼時讀和歌語第四十七

參河守大江定基送來讀和歌語第四十八

七月十五日女立允讀和歌語第四十九

筑前守源道濟侍妻最後讀和歌語第五十

大江匡衡妻赤染讀和歌語第五十一

大江匡衡和琴讀和歌語第五十二

祭主大中臣輔親郭公讀和歌語第五十三

五字無一本陽成院之御子元良親王讀和歌語第五十四

大隅國郡司讀和歌語第五十五

播磨國郡司家女讀和歌語第五十六

藤原惟規讀和歌被免語第五十七

北邊大臣長谷雄中納言語第一

今昔北邊の左大臣と申す人御座けり名を信と云ける嵯峨天皇の御子也一條の北邊に住給けるに依て北邊の大臣とい申す也萬の事止事无御座ける中に管絃の道となむ艶す知給たをける其中にも筆をなむ並无く彈給ける而るに大臣或時に夜る筆を彈給ける終夜心に興有て彈給ふ間曉方よ成て難有き手の止事无を取出て彈給ひける時よ我の心にも極しく微妙と思給けるに前の放出の隔子の被上たる上に物の光る様よ見けれ何の光るに有らむと思給て見給けるに長け一尺許なる天人共の二三人許有て舞ふ光り也けり大臣此を見て我か微妙き手を取て筆を彈くを天人の感て下來て舞ふ也けりと思給ふ哀よ貴く思給けり實に此れ奇異く微妙き事也亦中納言長谷雄と云ける

博士有けり世に並无^四をける學生也其人月の明りける夜大學寮の西の門より出て禮の板^伍の上に立て北様を見けれハ朱雀門の上の層に冠にて襖着たる人の長ハ上の垂木近く有るか吹を一文を頌して廻るなむ有ける長谷雄此を見て我れ此れ靈人を見る身乍らも止事无くなむ思ける此れ亦希有の事也昔の人ハ此る奇異の事共を見顯す人共なむ有けると語り傳へたること也

高陽親王造人形立田中語第二

高陽親王を申人御けり此は□□天皇の御子也極たる物の上手の細工になむ有ける京極寺と云ふ寺有り其寺ハ此親王の起給へる寺也其寺の前の河原に有る田は此寺の領也而るに天下旱魃しける年萬の所の田皆焼失ぬと嗟するに増て此の田は賀茂川の水を入れて作る田を

れは其河の水絶まければ庭の様に成て苗も皆赤みぬへり而るに高陽親王此と構給ける様長け四尺許なる童の左右の手ハ器を捧て立てる形を造て此田の中に立て人其童の持たる器に水を入れは盛受てハ即ち顔ハ沃懸る構を造たりけれハ此を見る人水を汲て此持たる器に入れば盛受て顔に沃懸々々すれば此を興して聞繼つ、京中の入市を成して集て水を器に入れて見興し嗶る事无限し如此爲る間に其水自然ら干田^四に水多く満ぬ其時に童を取隠しつ亦水乾きぬれハ童を取出して田の中に立てつ然れば亦前の如く人集て水を入る、程に田に水満ぬ如此しる其田露不焼してなむ止にける此極き構へ也此も御子の極たる物の上手風流の至る所也と人讚けるなど語り傳へたること也

小野宮大饗九條大臣得打衣語第三

今昔小野宮の大臣の大饗行ひ給ひけるに九條大臣の尊者にてなむ参給へりける其御送物に得給たりける女の装束に被副たりける紅の打たる細長を心无かりける前驅の取て出けるに取ハッ字拾して遣水に落し入たりければ即ち迷て取上て打振ひければ水の走て乾きにけり而るに其濕たをける方の袖の露水に濕たりとも不見して不濕方の袖に見競けるに只同様なむ打目有ける此と見る人打物とを譽め感しける昔は打たる物も此様にそ有ける今の世に極て難有き事也となむ語り傳へたる也や

於爪上勁殿返男針返女語第四

今昔□□天皇の御代に右近陣一□□の春近と云舎人有けり鞆をなむ極く微妙く蹴ける其春近の後の町の井の甕に押懸り立て若き女共

などの數有けるに見せむと思て鞆より勁殿を取出て手の爪に立て、井の上に差出て、四五十度許り返し立てけるを人集て此を見て興し感しける事无限り而る間年老たる女寄來て此を見て云く興有る態と給ふ主な古も此の態爲る人无かりきいて己れ習ひ申さむと袖に差たる針を拔出る緒糸を付乍ら爪を上にして四五十度計返しければ此と見る人皆奇異く思けり其時に春近此を見て□□て勁殿差てけり此希有の事共也昔の墓无き事共に付ても此様の態爲る者共も有ける也となむ語り傳へたる也や

百濟川成飛驒工桃語第五

今昔百濟の川成と云ふ繪師有けり世に並无き者にて有ける瀧殿の石も此川成り立たる也けり同き御堂の壁の繪も此の川成り書たる也而

る間川成從者の童の逃しけり東西を求けるに不求得りければ或高家の下部を雇て語ひて云く己れ四年來仕つる從者の童既に逃にけり此尋て捕て得させよと下部の云く安事よ有れとも童の顔を知たらんこそ搦めんと顔を不知して何ての搦めむと川成現に然る事也と云て墨紙を取出て童の顔の限を書て下部に渡し此よ似たらむ童を可捕き也東西の市の人集る所也其邊に行て可伺き也と云へ下部其顔の形を取て即ち市に行ぬ人極て多りりと云へとも此に似たる童无一暫く居て若やと思ふ程に此似たる童出來ぬ其形を取出て競ふるに露違たる所無し此也けりと搦て川成の許に將行ぬ川成此を得て見るに其童極く喜ひけり其比此を聞く人極き事になむ云ける而るに其比飛彈の工と云ふ工有けり都遷の時の工也世に並あき者也武樂院の其工の起

たれの微妙なるへし而る間此工彼の川成となむ各其態を挑よける飛驒の工川成に云く我が家よ一間四面の堂をなむ起たる御して見給へ亦壁に繪をな書て得させ給へとなむ思ふと互に挑乍ら中吉くてなむ戯れけれは此く云事也とて川成飛驒の工の家に行ぬ行て見れば實よ可咲氣なる小さき堂有り四面に戸皆開たり飛驒の工彼の堂に入て其内見給へと云へは川成延に上て南の戸より入らむと爲るに其戸はたと閉つ驚て廻て西の戸より入る亦其の戸はたと閉ぬ亦南の戸の開ぬ然れば北の戸より入るには其戸の開て西の戸の開ぬ亦東の戸より入るに其戸は閉て北の戸の開ぬ如此廻々る數度入らむと爲るよ閉開つ入る事を不得て延より下ぬ其時に飛驒の工咲ふ事无限り川成妬と思て返ぬ其後日來と經て川成飛驒の工の許に云遣る様我が家に御座

せ見せ可奉物なむ有ると飛驒の工定めて我を謀らむするなめりと思て不行かを度々勲に呼へハ工川成り家より行き此來れる由と云入れたるに此方に入給へと令云む云に隨て廊の有る遣戸を引開たれば内に大きなる人の黒と脹息たる臥せり脹息事鼻に入様也不思懸に此る物を見たれば音を放て愕て去返ぬ川成内に居て此音を聞て咲ふ事无限り飛驒の工怖しと思て土に立てるよ川成其遣戸より顔を差出て耶己れ此も有けるは只來れと云ければ恐々つ寄て見れば障紙の有るに早う其死人の形を書たる也けり堂に被謀たる如妬きに依て此くしたる也けり二人の者の態此なむ有ける其比の物語に萬の所に此を語てあむ皆人譽けるとなむ語り傳へたるとや

若擲寬蓮值若擲女語第六

今昔六十代延喜の御時若勢寬蓮と云ふ二人の僧若勢の上手にて有けり寬蓮の品も不賤して宇多院の殿上法師にて有ければ内にも常に召て御若と遊はしけり天皇も極く上手に遊しければ受寬蓮には先二つなむ劣させ給ひけり常に遊はしける程に金の御枕を懸物よて遊しけるよ天皇負させ給ひければ寬蓮其御枕を給りて罷出るを若き殿上人の勇ぬるを以て奪ひ取せ給ひければ此様に給はりて罷出るを奪ひせ給ふ事度々に成にけり而る間猶天皇負させ給て寬蓮其御枕を給りて罷出けるを前の如く若き殿上人數追て奪ひ取らむと爲る時よ寬蓮懷より其枕を引出て后町の井に投入れつれば殿上人は皆去ぬ寬蓮は踊て罷出ぬ其後井に人を下して枕を取上て見れば木を以て枕に造て金の薄と押たる也けり早く實の枕を以て取て罷出にけり然る枕を構

へ持たりけるを投入れける也けり然て其枕を打破つ仁和寺の東の邊に有る彌勒寺と云寺を造たる也けり天皇も極く構たをて咲はせ給にけり此で常に参り行程に内より罷出て一條より仁和寺へ行とて西の大宮を行く程に袖袴着たる女の童の穢氣无き寛蓮の童子無々を一人呼ひ取て物を云ふ何事と云に有らむと思て見返を見れり童子車の後に寄來て云く彼の候ふ女の童の申し候也白地に此の邊近き所に立寄らせ給へ可申き事の有る也と申せと候ふ人の御する也となむ申れと寛蓮此を聞て誰か云はするに有らむと恠く思へとも此の女の童の云ふに隨て車を遣せて行く土御門と道祖の大路との邊に檜塙して押立門なる家有り女の童此也と云へり其に下て入て見れば前に放出の廣庇有る板屋の平みたる前の庭に籬結て前栽をなむ可有わらわ

殖て砂など詩たり賤小家なれとも故有て住成たり寛蓮放出に上て見れば伊與簾白くて懸たを秋の比の事なれば夏の几帳清氣にて簾に重ねて立たり簾の許に巾鏑わらわたる若柀有り若石の筒可咲氣にて柀乃上に置たり其傍に圓座一つを置たり寛蓮去て居たれば簾乃内に故々しく愛敬付たる女の音して此寄らせ給へと云へり若盤の許に寄て居ぬ女の云く只今世に並无く若を擲給ふと聞けり然ても何許に擲給ふに有らむと極て見ま欲く思えて早ふ父にて侍りし人の少し擲と思て侍りしは少擲習へとて教へ置て失侍て後絶て然る遊も重く不爲に此通り給ふと自然ら聞傳つれ憚乍ら咲て可く糸可咲く候ふ事わらわな然ても何許遊はすにり手何つ許の受させ云給きとて若盤の許に近く寄ぬ其間簾の内よを空薫の香馥く匂出ぬ女房共簾よを臨合たり其

時は寛蓮若石筒を一に取て今一つを簾の内に差入れたれば女房の云く
 二共□□給ひぬれ然て其に置給へと申□□□何て□□耻々しく擲む
 寛蓮系可咲くも云ふかなと心に思えて若石の筒を二つ乍ら前に取置
 て女の云はむ事を聞ゆむと思て若石筒の蓋を開て石を鳴して居たり
 此寛蓮の故有て心はせなと有けれの宇多院にも然る方の者に思食
 たる心せはなれと此を極く興有て可咲く思ふなるへし然て几帳の綻
 より卷敷木の様は削たる木の白く可咲氣なるり二尺許なるを差出て
 丸の石の先つ此に置給へと云て中の聖目を差し手と可受申けれとも
 未だ程も知らぬ何とありと思へは先つ此度の先をして其程を知て
 こその十廿も受け聞ゆめと云へは寛蓮中の聖目に置つ亦寛蓮擲つ女
 の可擲つ手をは木と以て教ふるに隨て擲持行く程に寛蓮皆殺しに被

擲ぬ纒生たる石は結に差まゝ手重く不擲ねとも大方を衛て手向へ
 可爲くも非ず其時に寛蓮思はく此の希有に奇異の事な人には非て
 變化の者なるへし何て我れに會て只今此様に擲つ人の有らむ極て
 上手也と云ふもと此く皆殺しには被擲なむやと怖しく思て押壞つ物
 可云方も思はぬに女少し咲たる音にて亦やと云へも寛蓮此る者には
 亦物不云を吉れと思て尻切も履不敢へ逃て車に乗て散して仁和寺に
 返て院に參て然々の事なむ候つると申ければ院も誰に有らむと不
 審からせ給て次の日彼の所に人を遣して被尋けるに其家に人一人も
 無し唯留守に可死氣なる女法師一人居たり其に昨日此に御座ける人
 と問へは女法師の云く此の家にと五六日東の京より土忌給ふとて
 渡り給ひたりと夜前返り給ひよと院の御使の云く其渡り給ひ

たりけん人とは誰と云ふ何に仕給と女法師の云く己は誰と知侍らむ此家主は筑紫に罷にき其と知り給へる人にや有けむ□□□□
□不知侍と御使己下丹本一ホニアリトミユりへりて□くと□たりければ其後の沙汰无くてなむ止にける内よも此由を聞食て極く奇異のらせ給にけり其時の人の云は何て四人にての寛運に會て皆殺しにの擲たむ此は變化の者などの來りけるなめりどを疑ひける其比の此事をなむ世に云合へりけるとなむ語り傳へたるとや

行典藥寮治病女語第七

今昔典藥頭□□と云人有けり道に付て止事无き醫師也ければ公私に被用たる者にてなむ有ける而る間七月七日典藥頭の一家の醫師共并に次々の醫師共下部に至まで一人不殘寮に參り集て逍遙しけり廳

屋の大なる内に長筵を敷滿て其に着並て各一種物酒などを出して遊ぶ日也けり其時に年五十許の女の无下の下衆よも非ぬの淺黄なる張單無々に賤の袴着て顔は青鈍なる練衣に水と裏たる様にて一身ゆふくと腫たる者々の下衆に手と被引て廳の前に出來たる頭より始めて此を見て彼れは何にを何と集て問ふよ此腫女の云く己れ此腫て五六年に罷成ぬ其を殿原に何のて問申さむと思へとも片田舎に侍る身なれば其御せと申さむに可御さにも非ぬは何て殿原の一所に御座集たらむ時に見奉て名宜む事を承らむと思ふ也獨々に見せ奉れば各心々に宜へは何よ可付テマに有らむと思えて墓としくも被治不侍ら其に今日此集給ふと聞て參たる也然れば此御覽して可治のらん様被仰よと云て平のり臥ぬ典藥頭より始て此を聞くに賢き女也現に然る事也

思ふ頭の云くいて主達彼れ治し給へ此の寸白にこそ有ぬれと云て中に美と思ふ醫師を呼て彼れ見よと云へは其醫師寄て此を見て云く定て寸白に候ふめりと云ふ其とは何の可治と醫師の云く抜く本マに隨て白き夢の様なる物差出たり其を取て引けは綿々と延れは長く出來ぬ出るに隨て塵の柱よ巻く漸く巻くよ隨て此女顔の腫□て色も直り持行く柱に七尋八尋許巻く程に出來畢て残り出來す成ぬ時に女の目鼻直り畢て例の人の色付に成ぬ頭より始めて若子の醫師共皆是を見て此女の此來て病を治しつるを感じ讚め惶る事无限其後女の云く然て次には何の可治醫師只葦苳湯を以て可茹き也今其より外の治不可有と云て返し遣てけり昔此様に下葛醫師共の中よも新たに此病を治し愈す者共なむ有けるとなむ語り傳へたるとや

女行醫師家治瘡迷語第八

今昔典藥頭にて□□□と云止事无き醫師有けり世に並无き者也ければ人皆此人を用たりけり而る間此典藥頭よ極く裝束仕たる女車の乗泛れたる入る頭此茂見て何くの車をと問ぬれとも答へも不爲して唯遣に遣入れて車を搔下して車の頸木を部の木に打懸て雑色共は門の下に寄て居ぬ其時に頭車の許に寄て此は誰の御ましたるに何事を被仰に御座たるをと問ハ車の内に其人とは不答して可然らむ所に局して下し給へと愛敬付き可咲き氣をひにて云へは此の典藥頭は本よりすれ、しく物目出しける翁にて内に角の門の人離れたる所を俄に掃淨めて屏風立て疊敷なとして車の許に寄て□□□たる由を云へは女然らは去給へと云へは頭去て立るよ女扇を差隠して居り下ぬ車よ

共の人乗たらむと思ふに亦人不乗ら女下るよまゝに十五六歳許なる
□□の女の童を車の許に寄來て車の内なる詩繪櫛の篋取て持來ぬれ
は車の雜色共寄て牛懸て飛ふり如くに□□の去ぬ女房のる□所に居
ぬ女童は櫛の篋を裏て隠して屏風の後に屈居ぬ其時頭寄て此は何な
る人の□何事被仰むするを疾く被仰よと云へは女房此入給へ耻不聞
まじと云へは頭簾の内に入ぬ女房差向たるを見れば年卅許なる女の
頭付より始て目鼻口此は樊ツギナと見ゆる所無く端正なる髪極く長し
香馥イソギとて艶ぬ衣共を着たり耻イソギとく思たる氣色も无くて年來の妹
などの様に安らイソギに向ひたり頭此を見るに希有の恠と思ふ何様にて
も此は我の進退に懸らむする者なめりと思ふに齒も无極て萎る顔を
極く咲て近く寄て問ふ況や頭年來の嫗共失せて三四年に成にければ

妻も无て有けり程よて喜と思ふに女の云く人の心の疎イソギりける事は
命の惜さには萬の身の耻も不思りければ只何ならむ態をしても命を
たに生なはせ思えて参り來つる也今は生けむも殺さむも其御心也身
を任せ聞ゆつればとて泣事无限り頭極く此を哀と思て何なる事の候
ふそと問へは女袴の股立を引開て見すれば股の雪の様に白きよ少面
腫たり其の腫頬心不得見これは袴の腰を令解て前の方を見れば毛の
中にて不見え然れば頭手を以て其を搜れば邊に糸近く瘧たる物有り
左右の手を以て毛を搔別て見れば專に可愼き物也□□にこそ有けれ
は極く糸惜く思て年來の醫師只此の功に无き手を可取出き也と思て
其日より始めて只人も不寄自ら禪上をして夜る晝ツギナ疏ツギナふ七日許疏て見
るに吉く愈ぬ頭極く喜イソギく思て今暫くは此て置たらむ其の人と聞てこ

を返さめなを思て今ハ氷す事をは止めて茶院の器に何薬にて有ら
む摺入たる物を鳥の羽を以て日に五六度付く許也今ハ事にも非すと
頭の氣はひも喜氣に思たり女房の云く今奇異く有様をも見せ奉り
つ偏祖と可奉憑也然れば返らむにも御車にて送り給へ其時に其
は聞えむ亦此にも居らむと思て緩て有る程に夕暮方に女房宿直物の
薄綿衣一つ許を着て此女の童を具して逃にけるを頭此とも不知て夕
の食物參らせむと云て盤に調へ居て頭自ら持て入ぬるに人も無し只
今可然ハ事構つる時にこそは有らめと思て食物を持返ぬ而る程暮
ぬれば先つ火灯と思て火を燈臺に居て持行て見るに衣共を脱き散ら
たり櫛の篋も有り久く隠れて屏風の後に何態するに有らむと思て
此久くは何態せさせ給ふと云て屏風の後を見に何しは有らむ女

の童も不見え衣共着重たりしも袴も然乍ら有り只宿直物よて着たり
薄綿の衣一つ許なむ无き々に有らむ此人は其を着て逃にけるあ
めりと思ふも頭胸塞りて爲む方も无思ゆ門を差て人々數手毎に火を
灯して家の内を□し何にしは有らむ无ければ頭女の有つる顔有様
面影に思えて戀く悲き事无限り不思して本意をこそ可遂かりけれ何
よし疏ツクひて忌つらむと悔く妬くて然れば无くて可憚き人も无きに
人の妻などよて有らは妻に不爲と云ふとも時々も物云はむに極き者
備つと思つる者をとつらツクと思ひ居たに此く被謀て逃しつれば
手を打て妬かり足摺をして極氣なる顔に貝を作て泣けれハ弟子の醫
師共ハ密に極くなむ咲ひける世の人々も此を聞て咲て問ければ極く
嗔り諍ける思ふに極く賢かりける女也遂に誰をも不被知ら止に

けりとなむ語り傳へたるや

嫁蛇女醫治語第九

今昔河内國の讚良の郡馬甘の郷に住む者有けり下姓の人と云へとも大きに富て家豊也一人の若き女子有り四月の比其女子蠶養の爲に大きなる桑の木に登て桑の葉を摘けるに其桑の路の邊に有ければ大路を行く人の道を過くとして見ければ大きなる蛇出來て其女の登れる桑の木の本を纏て有り路を行く人此れを見て登れる女に蛇木を纏へる由に告ぐ女此を聞て驚て見下しければ實に大きなる蛇木の本を纏へり其時に女恐ち迷て木より踊り下るゝ蛇女に纏付て即ち婚ぬ然れは女焦迷て死たるり如くして木の本に臥す父母此を見て泣き悲むて忽に醫師を請て此を問むとするに其の國に止事无き醫師有り此を

呼て此事を問ふ其間蛇女と婚て不離れ醫師の云く先づ女と蛇を同じ床に乗せて速に家に將返らば庭に可置くと然れば家に將行死て庭に置つ其後醫師の云ふは隨て稻の藁三束を焼く三尺を一束に成して三束とす湯に合せて汁三斗を取て此を煎して二斗に成して猪の毛十把を尅み末して其汁に合せて女の頭を裹て足を釣り懸て其汁を開の口に入る一斗を入るに即ち離れぬ這て行くを打殺して奔つ其時に蛇の子凝て蝦蟆の子の如くして其猪の毛蛇の子に立て開より五升許出つ蛇の子皆出畢ぬれば女悟驚て物を云ふ父子泣々此事共を問ふに女の云く我の心更に物不思して夢を見る如くなむ有つるを然れば女藥の方に依て命を存する事を得て慎み恐れて有けるに其後三年有て亦此の女蛇と婚て遂に死しけり此度は此れ前生の宿因也けりと知て

今昔物語集 卷第十 震旦僧長秀來此朝被仕醫師語第十

治する事无くて止にけり但し醫師の力藥の驗不思議也となむ語り傳へたるとや

震旦僧長秀來此朝被仕醫師語第十

今昔天曆の御時に震旦より渡たる僧有けり名をは長秀となむ云ける本醫師にてなむ有ければ鎮西に來けるに居付て不返さしてりければ京に召上て醫師になむ被仕ける本止事无き僧にて有ければ梵釋寺の供僧に被成て公家に被召仕けり然て年來て經る間に五條と西の洞院とよよ□□の宮と申す人御す其宮の前に大きな桂の木の有ければ桂の宮とそ人云ける長秀其宮に參て物申し居る程に此の桂の木を見上げて云く桂心と云ふ藥は此國にも候けれど人の否不見知無れこそ候けれ彼れ取り候とむとて童子と木に登せて然々の枝を切下せと云

へは童子登て長秀の云ふに隨て切下したるを長秀寄て刀を以て桂心有る所を切取て宮に來けり少しを申し給はりて藥に仕けるに唐の桂心には増て賢りければ長秀の云けるに桂心は此國にも有ける物と見知る醫師の无をければ事極て口惜き事也となむ云ける然れば桂心は此國にも有けると見知れる人の无くて不取なるを長秀遂に人に教ふる事无くて止にけり長秀止事无き醫師てなむ有ける然れは長秀藥を造て公に奉たりけり其方于今有となむ語り傳へたるとや
忠明治值龍者語第十一

今昔□□天皇の御代に内裏に御ましける間夏比冷せむとて籠口共數八省の廊に居たりける程に徒然也ければ一人の籠口有て此く徒然なるに酒肴を取りに遣し侍らはやと云ければ他の籠口共此を聞て系吉

き事也早く取りて可遣と口々に責ければ此龍口從者の男を呼て打松^{本マ}て遣つ男南^{ウキ}様に走て行ぬ今は十町許も行ぬらむと思ふ程に空陰て夕立しけれ龍口共物語などして廊に居たる程雨も止み空も晴ぬれは今や酒持來ると待けるに日の暮るまで行つる男も不見りければ去來返りかむとて皆内裏に返ぬ此酒取りに遣つる龍口の奇異く腹立て思へとも云甲斐无くて共に返て本所に有るに此遣つる男其夜も不見りければ希有の事ゆな此の只の事には非し此男の道よて死たる若し重き病を受たるゆと終夜思ひ明ぬ明る遅きと朝疾く家に念き行る先つ昨日此男遣し事を語るよ家の人の云く其男の昨日來たりて死たる様にて彼に臥たる何にも物も不云て□として臥たるを云へは龍口寄て見るに實に死たる様にて臥たり物問へとも答も不爲に

□に動く極く恠くて近き程にて有ければ龍口忠明朝臣と云ふ醫師乃許に行て然々の事なむ候ふ何なる事と問ければ忠明の云く不知や其事難知し然らば□灰を多く取り集めて其男を其の灰中に埋て置て暫く見よと教へければ龍口返て忠明の教へに隨ふ灰を多く集て其中に男と埋て置て一二時許を経て見るよ灰動ければ掻開て見るに此男例の様に成て數して有けるよ水飲せなどして後人心地よ成畢にければ此は何なりつる事と問ければ男の云く昨日八省の廊にて仰を承て急き美福下りに走り候しに神泉の西面にて俄に雷電して夕立の仕りし程に神泉の内の暗に成て西様に暗り罷をしに見遣たりしに其暗ゆたる中に金色なる手の鏑と見えしを急と見て候しより四方よ暗塞かりて物も不思して待しを然りとて路に可臥き事よ非り

しは念して此殿に参り着ては鬚に思え侍り其後の事へ更に思え不侍と瀧口此を聞る恠み思て亦忠明の許に行て彼の男仰せのまゝに灰に埋たりしかは暫く有て人の心に直て然々なむ申すと云ければ忠明嘲笑て然れはこそ人の龍の體を見て病付ぬるには其治より外の事无と云ければ瀧口返て後に陣に参て他の瀧口共に此事と語ければ瀧口共も忠明をを讚め感しけり世にも此事聞て皆忠明をを讚めける凡そ此れのみよ非す此の忠明止事无き醫師にてそ有けるとなむ語り傳へたるとや

雅忠見人家指有瘡病語第十二

文缺

慈岳川人被追地神語第十三

今昔文徳天皇の失させ給へりけるに諸陵を點せむの爲に大納言安倍安仁と云ける人承はりて其事を行ひけり口を引具して諸陵の所に行く其時に慈岳の川人と云陽陰師有けり道に付て古にも不耻世に並无き者也其を以て諸陵の所を點して事畢ぬきは皆返けるに深草の北の程を行くに川人大納言の許に近く馬を打寄せて物云はむと思たる氣を見ぬ大納言耳に聞けは川人か云く年來墓々敷は非とも此道に携て仕り私を願つるに未だ誤りつ事无かりつ而るに此の度大きに誤候にけり此に地神追て來にたる也其は貴殿と川人こそ此罪をは負つらぬ此は何の爲させ給はむと爲る難遁き事にこそ待めれと極く騒たる氣色にて云を聞くに大納言惣て物不思え成ぬ只我れは此も彼も不思え助けよと云ふ川人々云く然りとて可有き事よも非す試に隠れ可給

き事を構へむと云て後に送れぬ人皆前に行けと勸めて遣りつ而る
 間日暮ぬれば暗に交に大納言も川人も馬より下て馬をは前へ遣て只
 二人田の中に留て大納言を居えて其上に田に對置たる稻を取積て川
 人其の廻を密に物を讀給つ返り廻りて後川人も稻の中を引開て這
 入て大納言と語て居ぬ大納言川人の氣色極く騒てわなき篩ふを見
 るに半は死ぬる心地す此て音も不爲して居たる程に暫許有て千萬の
 人の足音して過く既過て行ぬと聞つる者共即ち返來て物云ひ騒く
 なるを聞けは人の音に似たを云へとも□に人には非ぬ音と以て云
 く此者の此程こそ馬の足音は輕く成つれ然れ此の邊に集りて隙
 無く土一二尺程を掘て可求□き也然りとも否遁れ不畢川人の古の
 陰陽師に劣ぬ奴なれば□□にて否不見る様マ、ニテに構へたる然りとも奴

とは失てむや吉く□□と嗚る也然れとも敢て不候ぬ由を口々云騷
 けの主人と思しれ人然りとも否隱し不畢今日こそ隠るとも遂には其
 乃奴原に不會様は有なむや今來らむ十二月晦の夜半に一天下れ下土
 の下上の空目の懸らむを際として求めよ其奴原何の隠れむ然れば
 其夜可集也然て□□出さむと云て去ぬ其後大納言川人走上て出ぬ我
 にも非ずして大納言の云く此れを何かせむと爲る云つる様に求めは
 我等の可遁き様無し川人の云く此く聞つれば其夜露人に不被知して
 只二人極く隠れ可給き也其時近く成て委くは申し侍らむと云て川原
 に有ける馬の許に歩より行て各家に返ぬ其後既に晦日に成ぬれば川
 人大納言の許に來て云く露人知る事无くて只一人二條と西の大宮と
 の辻に暗く成らむ程に御座會へと大納言此と聞て暮方に成る程也

市中世中の人も騒しく行き違ふ交に只獨り二條と西大宮との辻に行ぬ川人兼て其に待立ければ二人打具して嵯峨寺へ行ぬ堂の天井の上に搔上て川人は呪と誦し大納言は三滿を唱へて居たり而る間夜半許に成る程に氣色悪くて異なる香有る風の温かなる吹て渡る其程地震の振る様は少許動て過ぬれば怖しと思て過ぬれば鳥鳴ぬれの搔下て未だ不明程は各家に返ぬ別る時に川人大納言に云く今の恐れ不可給然は有れとも川人なれば此の構て遁れぬるをかしと云て去にけを大納言川人を拜してそ家に返にける此れを思ふに尙川人止事无き陰陽師也となむ語り傳へたるとや

天文博士弓削是雄占夢語第十四

今昔□□と云ふ者有けり穀藏院の使として其封戸を徴らむの故に東

國の方に行て日來を経て返上る間近江國の勢多の驛に宿ぬ其時に其國の司□と云ふ人館に有て陰陽師天文博士弓削是雄と云ふ者を請し下して大屬星を令敬むと爲る間是雄彼の□と同宿しぬ是雄□□に問て云く汝何れの所より來るぞと□□答て云く我れ穀藏院の封戸を徴らむの爲に東國に下て今返上れる也と如此互に談する間夜は臨て皆寢入ぬ而るに忽に惡相を見て覺て後□□是雄に云く我れ今夜惡相を見つ而るに我れ幸に君と同宿せり此夢の吉凶を占ひ可給と是雄占て云く汝ち明日家よ返る事无かれ汝を害せむを爲る者汝か家に有り二字缺と男か云く我れ日來東國に有て疾く家に返らむ事を願ふに今此に來て又此にて徒に亦數日を可過きに非ず亦數の公物私物其員有り何々此は留らむや但し何にしての彼の難を可遁きと是雄は云く汝ち尙

強に明日家に返らむと思は、汝を殺害せむと爲る者の家の丑寅の角なる所に隠れ居たる也然れは汝ち先づ家に行着て物共をハ皆取置せて後汝ち一人弓に箭を番て丑寅の角に然様の者の隠居ぬヘハらむ所に向て弓を引て押宛て云はむ様ハ己れ我東國より返上るを待て今日我を殺害せむと爲る事を兼て知れり早く罷り出よ不出ハ速に射殺してむと云へ然らば法術を以る不顯と云ふとも自然ら事顯れなむと教へつ□□其教へを得て明る日京に急返ぬ家に行着たれば家の人御座たりと云て騒き鳴る事无限り□□一人ハ不入して物共をハ皆取置せて□□ハ弓に箭を番て丑寅の角の方を廻て見るよ一間なる所に薦を懸たを此なめりと思て弓を引て箭を差宛て云く己れ我ハ上るを待て今日我を殺害せむとす我其由を兼て知たり早く罷出よ不出ハ射殺し

てむと云ふ其時に薦の中より法師一人出たり即從者を呼て此を搦て間に法師暫くは此彼云て不□□強に問けれハ遂に落て云く隠し可申き事にも非ず己ハ主の御房の年來此殿の上ハ棲奉り給つるに今日上給ふ由を聞き給て其を待て必ず殺し奉れと此殿の上の被仰つれを罷隠れて候つる兼て知らせ給ひにけれハと□□此を聞に我宿報賢くして彼是雄と同宿して命と存する事を喜ふ亦是雄ハ此く占へは實なる事感して先づ是雄ハ方に向て拜しけり其後法師をは檢非違使に取せてけり妻をは永く不棲成よけり此を思ふに年來の妻也と云とも心は不可緩女の心ハ此る者も有る也亦是雄ハ占不可思議也昔ハ此く新たなる陰陽師の有けり也となむ語り傳へたるをや
賀茂忠行道傳子保憲語第十五

今昔賀茂忠行と云陰陽師有けり道に付て古にも不耻て當時も肩を並
ふ者無し然れば公私に此を止事无き者も被用ける而るに人有て此忠
行も稜と爲させければ忠行稜の所に行かむとて出立けるに其忠行
子保憲其時に十歳許の童にて有けるに父忠行も出ける強に戀ければ
其兒を車に乗せて具して將行にける稜殿に行て忠行は稜を爲るも兒
は其傍に居たり稜畢ぬれば稜を爲る人も返ぬ忠行も此兒を具して返
るも車もて兒の祖に云様父古曾と呼へは忠行何ぞと云へは兒の云く
稜の所もて我も見つる氣色怖氣なる體したる者共の人にも非ぬ也
□に亦人の形の様もして二三十人許出來て並居て居るたる物共を取
食て其造置たる船車馬などに乘てこそ散々に返つれ其れ何ぞ父よ
と問へは忠行此を聞て思ふ様我れこそ此道に取て世に勝たる者なれ

然れとも幼童の時には此く鬼神を見る事も无かりき物習てこそ漸く
目にい見しか其れに此れに此く幼き目に此鬼神を見るに極て止事无
き者に可成き者にこそ有ぬれ世も神の御代の者にも不劣と思て返け
るまゝも我も道に知と知たりける事の限をい露殘す事无心を至して
教へけり此れに祖の思けるに不違は保憲の止事无き者もて公私も仕
へて聊も弊ツギき事无くてこそ有ける然れば其子孫于今榮えて陰陽の道に
並無し亦曆を作る事も此流を離ては敢て知る人無し然れば今に止事
无しとなむ語り傳へたるもや

安倍晴明隨忠行習道語第十六

今昔天文博士安倍晴明と云陰陽師有けり古にも不耻ち止事无りける
者也幼の時賀茂忠行と云ける陰陽師に隨て晝夜に此道を習けるも聊

も心もと死事無かりける而るに晴明若かりける時師の忠行々下渡に夜行に行ける共に歩いて車の後に行ける忠行車の内にして吉く寝入よけるに晴明見けるよ艶す怖き鬼共車の並に向て來けり晴明此を見て驚て車の後に走り寄て忠行を起して告げれば其時に忠行驚て覺て鬼の來るを見て術法を以て忽に我の身をも恐れ無く共の者共ども隠し平かに過にける其後忠行晴明を難去く思て此道を教ふる事瓶の水を寫す如し然れば終に晴明此道よ付て公私に被仕て糸止事無のをけり而る間忠行失て後此晴明の家へ土御門よりへ北西の洞院よりは東也其家に晴明の居たりける時老たる僧來ぬ共に十餘歳許なる童二人を具したり晴明此を見て何その僧の何よを來れるそと問への僧己は播磨國の人に侍り其は陰陽の方となむ習はむ志侍る而るに

只今此道に取て止事无御座す由を承はりて小々の事習ひ奉らむと思給へて参り候つる也と云へと晴明の思はく此法師の此道よ賢き奴にこそ有ぬれ其れを我を試むと來たる也此奴は僻く被試ては口惜かりなむかし試に此法師少し引き接せむと思て此法師の共なる二人の童は識神の仕て來たるなり若識神ならば忽に召し隠せと心の内よ念して袖の内に二の手を引入て印を結密に呪を讀む其後晴明法師に答へて云く然る承はりぬ但し今日は自ら暇无き事有り速に返り給て後に吉日を以て坐せ習をむと有らむ事共の教へ進らむと法師穴賢と云て手を押摺て額に宛て立走て去ぬ今と一二町へ行ぬらむと思程に此法師亦來たり晴明見れば可然所に車宿あとをこそ臨行めれ臨行て後に前に寄來て云く此共に侍つる童部二人乍ら忽に失せて候ふ其れ

給はり候はむと晴明云く御房の希有事云ふ者如な晴明の何の故の人の御共ならむ童部をと取らむするを法師の云く我の君大ある理に候ふ尙免と給はらむと住けれの其時に晴明云く吉々御房の人試とて識神を仕て來たるの不安思つる也然様には異人をこそ試め晴明をは此く不爲ておそ有りめと云て袖の手を引入て物を讀様にして暫く有ければ外の方より此童部二人乍ら走入て法師の前に出來たりけり其時に法師の云く誠に止事無く御座す由を承りて候つる也其は識神の古より仕ふ事安く候也人の仕たるを隠す事より更可有くも不候の穴忝今日を偏御弟子にて候はむと云て忽ち名符を書てなむ取せたりける亦此晴明廣澤の寛朝僧正と申ける人の御房に參て物申し承りける間若き君達僧共有て晴明の物語あとして云く其識神を

仕ひ給ふなるの忽ち人とは殺し給ふらむやと晴明道の大事を此く現にも問ひ給ふかなと云て安くは否不殺し少くたに入て候へは必ず殺して虫などをは塵許の事せむに必ず殺すつへきは生く様を不知は罪を得ぬへければ由无き也など云ふ程に庭より蝦蟆の五つ六つ許踊つゝ池の邊様に行けるを君達然は彼れ一つ殺し給へ試むと云ければ晴明罪造り給君りなるにても試と給はむと有れとて草の葉を摘切て物を讀様にして蝦蟆の方へ投遣たりければ其草の葉蝦蟆の上に懸ると見ける程に蝦蟆は眞平にありてそ死たりける僧共此を見て色を失てなむ恐ち怖れける此晴明は家の内一人无死時を識神を仕けるにや有けむ人も无きに部上げ下す事なむ有ける亦門も差す人も无かりけるに被差なむとあむ有ける此様は希有の事共多かりとなむ語り

傳ふる其孫于今公は仕て止事无くて有り其土御門の家も傳はりの所にて有り其孫近く成まで識神の音などは聞けり然れは清明尙只者には非りけりとなむ語り傳へたるをや

保憲清明共占覆物語第十七 文缺

以陰陽術殺人語第十八

今昔主計頭にて小槻の當平永と云者有けり其子に算の先生なる者有けり名三字缺をは茂助許となむ云ける主計頭忠臣の父淡路守大夫の史泰親の祖父也其茂助三字缺未だ若かりける程に身の才極て賢くして世に並无りければ命有らは人に勝れて止事无く成ぬへき者也ければ同程なる者共何て此无くても有れり此れの出立なほ主計主税の頭助にも大夫の史一も異人は更に可競き様无なめり成り傳へ來る孫なるに合せて

此く才賢く心もへ直しければ只六位乍ら世に聞ゆ有て思ひ高く成持行二けは無くても有りと思ふ人も有二や有らむ而る間彼の茂助の家二字缺に恠を爲したりければ其時の止事无き陰陽師は物を問に極て重く可慎き由を占ひたり其可慎き日共と書出して取せたをければ其日の門を強く差して物忌して居たりけるに彼敵に思ひける者は驗し有ける隠れ陰陽師を吉く語ひて彼必可死き態共を爲させける此事爲る陰陽師の云く彼人の物忌をして居たるは可慎き日にこそ有なれ然れは其日咀ひ合せはを驗の可有き也其れに已れを具して其家に御して呼一ひ給へ門の物忌なればよも不開只音をたに聞ては必咀ふ驗は有なむと然れば其人其陰陽師を具してわれり家に行て門を愕たしく叩ければ下衆出來る誰か此御門を叩ると問へは某か大切に可申き事あ

りて參たる也極く固き物忌と云ふとも門を細目に開て入れ給へ極たる大切也と令云れば此下衆返入て此なむと云への系破无き事な世に有る人の身思ぬやは有る然れば否開て入れ不奉まゝ更に不用也疾く返り給ひぬと令云たれば亦云ひ令入る様然らば門をば不開給はと云とも其遣戸よを顔を差出給へ自ら聞えむと其時に天道の許十有て可死き宿世や有けむ何事と云て遣戸より顔を差出したれば陰陽師其音を聞き顔を見て可死き態を可爲限り咀ひつ此具して會はむと云人の極き大事云はむを云つれ共可云き事も不思えりければ只今出舎へ態其由申さむと思て申しつる也然は入給ひと云けれ二字缺ハ茂助大事にも非りける事に依て物忌に此く人を呼び出る物も不思え主なと云て入にけり其夜より頭痛く成て惱みて三日と云に死まけり此と思ふ

に物己思には音を高くして人に不可令聞ハ亦外より來らむ人には努々不可會此の様の態爲る人の爲には其に付て咀ふ事なれと極て怖き也宿報とい云乍ら吉く可慎一となむ語り傳へたりとや

播磨國陰陽師智德法師語第十九

今昔播磨國□□乃郡に陰陽師を爲る法師有けり名をば智德と云けり年來其國に住て此道をして有けるニ其法師は系只者にも非ぬ努也奴けり而る間□□の國より上る船の多く物共を積て有けるを明石の前の沖に海賊來て船の物と皆移り取り數人を殺して去にけり只船の主計下人一兩人とを海に入なむとして生たりけるが陸に上て泣居たをけるを彼の智德杖と突て出來て此は何の人の泣居たるを問ければ船主の國よを上つるに此沖にして昨日海賊に罷會て船の物も皆被取れ

人も被殺て希有の命許を生て侍る也と云へは智徳極て糸惜き事りな
彼を搦め寄せはやと云へは船主只打云ふ事なめりとの思へとも何に
喜く侍らむと泣々云ふ智徳昨日の何時の事を問へは船主然々の時
也と答ふ其時に智徳小船に乗て船主を具して其沖に差出て其所に船
を浮へて海の上に物を書て物を讀懸て陸に返上て後事しも只今有る
者を搦めむする様に其道の人を雇て四五日護せけるに船被移て後七
日と云ふ□時計に何ちとも无くて被漂たる船出來り多の人兵仗を
帶して船に乗て漕ぎ寄せて見れとも物に吉く酔たる者の様にて逃な
むとも不爲して有けり早う彼の海賊也けり取れる所の物共不失して
有ければ船主の云ふに隨て皆運ひ取て主に取せてけり海賊共をは其
邊の者共有て搦めむとしけれとも智徳乞請て海賊共よ令云聞ける様

今より此る犯を成す事无の此命と可斷と云へとも罪障なれば此國に
は此る老法師有るを云て追逃してけり船主を喜き船諸こして去に
けり此偏に智徳の陰陽術を以て海賊を謀寄せたる也然れば智徳極て
怖しき奴よて有けるに精明の會てを識神を被隠たりける然れとも其
は其法を不知は不弊此る者播磨國に有けりとなむ語り傳へたるをや
人妻成惡靈除其害陰陽師語第二十

今昔□□と云者有けり年來住ける妻を去離れにけり妻深く怨を成
て歎きける程に其思ひに病付て日來憐て思ひ死に死けり其女父母も
无く親しき者も无かりければ死たりけるを以り隠し弄つる事も无く
て屋の内に有ける髪も不落して本の如く付たりけり亦其骨皆次
へりて不離けり隣の人物の迫より此を臨て見けるに恐怖る、事无限

り亦其家の内常に眞□□に光る事有けり亦常に物鳴りなむと有けれ
 と隣人も恐て逃げ迷ひけを而るに其夫此事を聞て半死ぬる心地し
 て何にして此靈の難を可遁からむ我を怨て思ひ死に死たる者な
 るは我の必ず彼れに被取なむとすと恐ち怖て□□と云ふ此事師の許
 に行て此事を語て難を可遁き事と云ければ陰陽師の云く此事極て難
 遁き事にてこそ侍なれ然の有れも此く宜ふ事也構へ試む但し其爲に
 極ての怖しき事なむと爲る其と構て念し給へと云て日此入る程陰
 陽師彼の死人の有る家に此の夫の男を搔具して將行ぬ男外にて聞つ
 るたに頭毛太りて怖しきに増して其家へ行ひ極て怖しく難堪けれ
 とも陰陽師に偏に身を任せて行ぬ見れば實し死人の髪不落して骨次
 かへりて臥たり背に馬に乗る様に乗せつ然て其死人の髪を強く引

へさせ努々放つ事なけれと教へて物を讀懸け鎮して自ら此に來むま
 ては此くて有れ定めて怖しき事有らむとす其を念して有れと云置て
 陰陽師は出て去ぬ男爲む方無く生たるにも心にも非て死人に乗て髪
 と捕て有り而る間夜に入ぬ夜半に成ぬらむと思ふ程に此死人穴重し
 ゃと云まゝに立走て云く其奴求めて來らむと云て走り出ぬ何とも不
 思ひ遙に行く然れとも陰陽師の教まゝに髪を捕て有る程に死人返ぬ
 本の家に來て同じ様に臥ぬ男怖しなど云へは愚也や物も不思議とも
 念して髪を不放して背に乗て有るに雞鳴ぬれの死人音も不爲成ぬ然
 程に夜明ぬれの陰陽師來て云今夜定めて怖しき事侍つらむ髪不放な
 りぬやと問へは男不放りつる由を答ふ其時に陰陽師亦死人の物を讀
 懸て鎮して後今の去來給へと云て男を搔具して家に返ぬ陰陽師の云

く今は怖れ不可給宣ふ事の難去ければ也となむ云ければ男泣々陰陽師を拜しけり其後勇敢て事无くして久しく有けり此近き事なるへし其人の孫于今世より亦其陰陽師の孫も大宿直と云所に于今有なりとなむ語り傳へたることや

登照相倒朱雀門語第二十一

今昔登照と云僧有けり諸の人の形を見音を聞き翔を知て命の長短と相し身の貧富を教へ官位の高下を令知む如此相するに敢て違ふ事无かりければ京中の道俗男女此登照の房に集る事无限り而るに登照物へ行けるに朱雀門の前を渡けり其門の下に男女老少の人多く居て休けるを登照見るに此門の下に有る者共皆只今可死き相有り此の何なる事と思て立留て吉く見るに尙其相現也登照此を思ひ廻すに只今

此者共の死む事何より依てを若し惡人の來て殺さむにても少々をこそ殺さめ皆忽に可死き様无し恠き態かなと思ひ廻すに若し此門の只今倒れなむするの然らんには被打壓て忽皆可死きと思ひ得て門の下に居並たる者共に向て其れ見よ其門倒れぬるに被打壓て皆死なむとす疾出よと音と高く擧て云ければ居たる者共此を聞て迷てはらはらと出けり登照も遠く去て立をけるに風も不吹地震も不振は鷹許門^{トカミ}鳴たる事も无きに俄に門只傾きに傾き倒れぬ然れば急き走り出たる者共の命を存しぬ其中に強顔くて遅く出ける者共の少々被打壓て死にけり其後登照人に會て此事を語ければ此を聞く人尙登照の相奇異也とを讚め感しけり亦登照の房の一條の邊より有ければ春比雨靜に降ける夜其房の前の大路を笛を吹て渡る者有けり登照此を聞て弟子の

僧を呼て云く此笛吹て通る者誰とは不知とも命極て残り无き音こそ聞ゆれ彼れに告げはやと云けれとも雨の痛く降るに笛吹く者只過に過たれと不云して止め明る日の雨止め其夕暮に夜前の笛吹れ亦笛を吹て返けると登照聞て此笛を吹て通る者の夜前の者にこそ有ぬれ其り奇異なる事の有也と云ければ弟子然にこそ侍ぬれ何事の侍るを問登照彼の笛吹く者呼て來と云ければ弟子走行て呼て將來たり見れり若き男也侍なめりと見ゆ登照前に呼ひ居えて云く其を呼ひ聞えつる事の夜前笛を吹て過給しよ命今明に終なむする相其笛の音に聞ゆり其の其事告申さむと思ひに雨の痛く降るに只過ぎ給ひよりの否不告申て極て糸惜と思ひ聞えしよ今夜其笛の音を聞けば遙に命延給ひよけり今夜何なる勤の有つると侍の云く己今夜指る勤め不候

は只此東に川崎と申す所に人の普賢講行ひ候つる伽陀に付て笛をそ終夜吹候つるを登照此を聞くに定めて普賢講の笛を吹て其結縁の功德に依て忽に罪を滅して命延にけをと思ふに哀れに悲くて泣々なむ男を禮ける侍も喜ひ貴ひて返よけり此近き事也此る新たよ微妙き相人なむ有けるとなむ語り傳へたることや

俊平入道弟習算術語第二十二

今昔丹後前司高階俊平朝臣と云者有りき後には法師に成て丹後入道とて有し其弟に官も无くて只有る者有けり名をは□□□其の閑院の實成の師の共に鎮西に下て有ける程に近く渡たりける唐人の身の才賢さ有けり其唐人に會て□□算置く事を習はむと云けれり初は心にも不入て更に不教りけるを片端少し算を置せて唐人此を見て汝の

極く算置つへき者也けり日本に有ては何にりはせむと爲る日本は算の道不賢る所なめり然れば我れに具して宋に渡らむと云ひ速に教へむと云ければ□□吉くをしへて其道に賢くたに可成くは云にこそは隨ひぬ宋に渡ても被用て可有くは日本に有ても何よりいせむ云はむに隨て具し渡なむと事吉く云ければ唐人其言に靡て算を心より入れて教へけり一事を聞て十事を悟る様なをければ唐人も我國に算置者多かりと云へとも汝許此道に心得たる者無し然れば必に我れに具して宋に渡れと云ければ□□も然也と云はむに隨はむと云ければ此算の術には病人を置いて愈る術も有り亦病を不爲人也と云へとも妬し憶ふと思ふ者をい忽に置き失なふ術も有り事として此算の術に離れたる事無し然れば更に如此きの事共を惜み不隠して皆汝に傳へてむを其

れに尙我れに具して宋に渡らむと誓言を立よと云ければ□□實には不思とも此を習ひ取らむと思ふ心にて少許は立てけり然れとも尙人を置いて殺す術をは宋に渡らむ時船にして傳へむと云て異事共とは吉教てけを而る間師安樂寺の愁に依て俄に事有て京に上げるよ其の共に上げるを唐人強く留めければ何て四年來の君の此る事有て俄に上り給はむに不送して留らむ其事を受て不違と思ふも主の此く騷て上り給ふ送せむと云にてこそ我事否違まじき也けむと思ひ知らめと云ければ唐人現よと思て然必ず返り來れ今明にても宋に渡なむと思ふに汝か來らむと待て具して渡らむと云ければ深く其契を成て□師の共に京に上にけり世の中冷き時には和ら宋に渡なまと思ければとも俊平入道も聞て強に制しければ鎮西へたにも不行の成けり

彼唐人は暫くの待ける程に音も无れの態と使を以て文を遣て恨み云
 けれども年老たる祖の有るの今明とも不知ねは其れ成らむ様見畢
 て行むと云ひ返して不行て止にけり唐人暫こそ待けれども不來りけ
 れは謀つる也けりと思て吉く咀てなむ宋に返を渡にける初は極く賢
 かりける者の彼の唐人に被咀て後に極て旄き物も不思ぬ様にてそ
 有ける然れば侘て法師に成にけり入道君と云て旄らひたる者の指る
 事无さにて兄の俊平入道の許と山寺とに行き通てそ有ける而る間俊
 平入道許にして女房共數有て庚申ける夜此入道の旄らひて片角
 居たりけるに夜深更まゝに女房共寢ふたかりて中に誇たる女房の云
 く入道君此る人は可咲き物語など爲る者なり人々咲ぬへりらむ物
 語に給へ咲て目覺さむと云ければ入道已は口つゝに侍れば人の咲ひ

給ふ許の物語も知り不侍ら然は有とも咲はむとたに有らひ咲奉ら
 むかすと云ければ女房は否不爲然は咲只のさむと有るは猿樂を給
 ふの其の物語にも増る事にてこそ有らめと云て咲ければ入道然も不
 侍ら只咲ひ奉らむと思ふ事の侍也と云ければ女房此は何事を然に
 疾く咲ひ給へ何に何に責ければ入道立走て物を引提て持來たり
 見れば算とはらくと出せの女房共此を見て此の可咲き事にて有る
 の去來然の咲はむと嘲けるよ入道答も不爲して算をさらリと置き
 居たり置畢て廣さ七八分許の算の有けるを手に捧て入道御前達然は
 咲ひ不給しや咲ひ奉らむと云ければ女房其算提け給へることを咲
 らめなど云合たりけるに其算を置くと爲ければ女房共皆るつゆに入
 りにけり痛く咲て止らむと爲れとも不止ま腸腹の切る様にて可死思

けれの咲ひ乍ら涙を流す者も有けり可爲き方无く入道に向てゑつ
 はに入たる者共の物をは不云して手と摺ければ入道然れはこそ申つ
 れ今ハ咲ひ飽き給ひぬらむと云ければ女房共ウナツキサワキテ字拾□て臥し返り咲ひ乍ら
 手を摺ければ吉く令侘て後に置たる算をさらくと押壞たりければ
 皆咲ひ醒まけり今暫たに有まじは皆死ま未た此許難堪き事こそ
 无かりつれと女房共云ける咲ひ極して集り臥てを病む様に有ける然
 れは人を置殺し置生る術も有と云けると傳へ習たらまじは極から
 まじを聞人皆云ける此く算の道ハ極て怖らき事にて有る也とそ人
 語りしとむな語り傳へたるとや

源博雅朝臣行會坂育許語第二十三

今昔源博雅朝臣と云人有けり延喜の御子の兵部卿の親王と申人の子

也萬の事止事无かりけり中にも管絃の道になむ極たりける琵琶をも
 微妙に弾けり笛をも艶す吹けり此人村上の御時に□□の殿上人に
 て有ける其時に會坂の關一人の盲庵を造て住けり名をは蟬丸とそ
 云ける此れは敦實と申ける式部卿の宮の雜色にてなむ有ける其の宮
 は宇多法皇の御子よて管絃の道に極りける人也年來琵琶を弾給ける
 を常に聞て蟬丸琵琶をなむ微妙し弾く而る間此博雅此道と強に好て
 求けるに彼の會坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞て彼の琵琶と極て
 聞ま欲く思けれとも盲の家異様なれは不行して人を以て内々に蟬丸
 に云せける様何と不思議所には住を京に來ても住らむと盲此を聞て
 其答へをは不爲して云く

新古今雜下
オナシコト同
 世中をともゆくてもすこしてむ

とやもわらやもはてしなけれ

と使返て此由を語けれと博雅此を聞て極く心慥く思えて心に思ふ様
我れ強に此道を好むに依て必此盲の會はむと思ふ心深く其に盲命有
らむ事も計難し亦我も命を不知ら琵琶に流泉啄木と云曲云り此の世
に絶ぬへれ事也只此盲のみこそ此を知たるなれ構て此の彈を聞ゆ
と思て夜彼の會坂の關に行にけり然れをも蟬丸其の曲を彈く事无
まければ其後三年の間夜々會坂の盲の庵の邊に行て其曲を今や彈く
今や彈くと竊に立聞けれとも更に不彈りけるよ三年と云八月の十五
日の夜月少上陰て風少し打吹たりけるよ博雅哀れ今夜は興有の會坂
盲今夜こそ流泉啄木は彈らめと思て會坂に行て立聞けるに盲琵琶を
播鳴して物哀に思へる氣色也博雅此を極て喜く思て聞く程に盲獨心

を遣て詠して云く

續古今雜中

あふさのせきのあらはのはけいさに

キよ續古

まひてをるたるよをすこととて

とて琵琶を鳴すに博雅これを聞て涙を流して哀れと思ふ事无限し盲
獨言に云哀れ興有る夜りな若し我れに非ぬ□□者や世に有らむ今夜
心得たらむ人の來かし物語せむと云を博雅聞て音を出して王城に有
る博雅と云者こそ此に來たれと云ければ盲の云く此申すは誰に御
座を博雅の云く我は然々の人也強に此道を好むに依て此の三年此
庵の邊に來つるに幸に今夜汝に曾と盲此を聞て喜ふ其時よ博雅も喜
ひ乍庵の内に入て互に物語なとして博雅流泉啄木の手を聞ゆと云
ふ盲故宮の此かむ彈給ひとて件の手を博雅に令傳てける博雅琵琶

を不具をければ只口傳を以て此を習て返々喜けり曉も返もけり此を
思ふに諸の道は只如此可好き也其れに近代の實に不然然れは未代に
の諸道は達者の少き也實に此れ哀なる事也如し彈丸賤き者也と云へ
とも年來宮の彈給ひける琵琶を聞て此極たる上手にて有ける也其り
盲も成にければ會坂に居たる也けり其より後盲琵琶を世に知る也
とさむ語り傳へたる也や

玄象琵琶爲鬼被取語第二十四

今昔村上天皇の御代に玄象と云ふ琵琶俄に失にけり此れは世の傳り
物にて極て公財にて有ると此く失ぬれば天皇極て歎かせ給て此る止
事无き傳り物の我の代にして失ぬる事と思し歎かせ給ふも理也此
れは人盜たるにや有らむ但し人盜取らば可持き様无き事なれ天皇

を不吉ら思奉る者世に有て取て損し失たるなめりとを被疑ける而る
間源博雅と云人殿上人にて有り此人管絃の道極たる人よて此玄象の
失ひたる事を思ひ歎ける程に人皆靜なる後博雅清涼殿にして聞け
るは南の方に當て彼の玄象を弾く音有り極て恠く思へは若僻耳かと
思て吉く聞くに正しく玄象の音也博雅此を可聞誤き事に非は返々驚
き恠むて人にも不告して瀾姿にて只一人杳許を履て小舎人童一人を
具して衛門の陣を出て南様に行くは尙南に此音有り近きにこそ有け
れと思て行くに朱雀門に至ぬ尙同様の南に聞ゆ然れば朱雀の大路
を南に向て行心に思はく此の玄象と人の盜て口樓觀にして密に弾ゆ
こそ有ぬれと思て急き行て樓觀に至り着て聞くに尙南に糸近く聞ゆ
然れば尙南に行て既に羅城門に至ぬ門の下に立て聞くに門の上の層

に玄象を弾也けり博雅此を聞くに奇異く思て此の人の弾に非一定めて鬼などの弾くにこそは有らめと思程に弾止め暫く有て亦弾く其の時に博雅の云く此誰か弾給ふを玄象日來失せて天皇求め尋させ給ふ聞今夜清涼殿よして聞くよ南の方に此音有り仍て尋ね來れる也と其時に弾止て天井より下るゝ物有り怖くして立去て見れば玄象に繩を付て下したり然れば博雅恐れ乍ら此を取て内に返り參て此由を奏して玄象を奉たりければ天皇極く感せさせ給て鬼の取たをける也となむ被仰ける此を聞く人皆博雅をなむ讚ける其玄象于今公財として世傳はり物にて内に有り此玄象の生たる者の様に有る弊く彈て不彈負せれば腹立て不鳴なり亦塵居て不巾る時よも腹立て不鳴なり其氣色現て見ゆなり或時には内裏に焼亡有にも人不取出と云へとも玄

象自然ら出て庭よ有り此奇異の事共也となむ語り傳へたるとや

三善清行宰相與紀長谷雄口論語第二十五

今昔延喜の御時に參議三善清行と云人有り其時に紀長谷雄の中納言秀才よて有けるに清行の宰相と聊に口論有けり清行の宰相長谷雄を云く无才の博士の古より今に至るまで世よ无し但し和主の時に始まる也と長谷雄此を聞と云へとも更答る事无かりけり此を聞人思はく然許止事无き學生なる長谷雄を然ら云けむに清行の宰相事の外の者にこそ有けれとを讚め感じける況や長谷雄答ふる事无かりければ理を思けるにや其時よ亦□の孝言と云ふ大外記有けり止事无かりける學生也彼の口論の事を聞て云けるに龍の昨合に被昨臥たりや云へとも不弊他の獸に不寄付事也と云ける此に長谷雄清行の宰相にこそ

此被云そめ他の學生の思ひ懸らむやと云心なるへし此を聞く人現し然る事也となむ云ける然れば長谷雄實に止事无き博士なれども尚清行宰相には劣たるにこそ其後長谷雄中納言まで成上て有けるに大納言の闕有るに依て此と望むとて長谷に詣て觀音に祈申しける夜の夢し示して宜はく汝ち文章の人たるに依て他國へ可遣き也と見て夢覺ぬ何ある示現し有らむと恠み思て京に返けり其後長谷雄の中納言幾程を不經して死にけり然きは示現の如く他國に生れにけりを人疑ひける世に紀中納言と云此れ也彼の清行の宰相は延喜の代の人なれに前に失にけり善宰相と云此也となむ語を傳へたることや
村上天皇與管原文時作詩給語第二十六

今昔村上天皇文章を好せ給ける間宮の鶯曉に轉ると云題を以て詩を

作らせ給けり露濃緩語園花底月落高歌御柳陰と天皇管原の文時と博士を召て此を被講けるに文時亦詩を作けり西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏聲と天皇此を聞食て我こそ此題の作積たりと思ふに文時り作れる詩亦微妙しと被仰て文時を近く召て御前にて我り作れる詩を偏頗なく難无して不憚可申しと被仰ける文時申て云く御製微妙に候ふ下の七字文時の詩も増て候ふを天皇此を聞食して世も不然此の響應の言也尚慥に可申と被仰て藏人頭□□を召て仰せ給ふ様文時若し此詩の勝劣を慥に不申の今より以後文時の申さん事我も不可奏と被仰けるを文時聞て極て半无を思えければ申さく實の御製と文時の詩と對に御座と天皇實も然らの誓言と可立しと被仰けるに文時誓言の否不立て申さく實にの文時か詩の今一膝居上候ふと申て逃去にけり

天皇此を讚め感せさせ給ふ事无限し古の天皇の文章を好て此なむ御けるをなむ語り傳へたるを

大江朝綱家尼直詩讀語第二十七

今昔村上天皇の御代に大江朝綱と云博士有けり止事无りける學生也年來道に付て公に仕けるに聊に心もと无き事无くして遂に宰相まて成て年七十餘にして失にける其朝綱の家二條と京極とになむ有ければ東の川原遙に見え渡て月ミヅ隠く見えけり而るに朝綱失て後數の年を経て八月十五夜ヨクの月極く明りまけるに文章を好む輩十餘人伴ひて月を翫ハシひむ爲に去來故朝綱の二條の家に行ひむと云て其家に行にけり其家を見れり舊く荒て人氣無し屋共も皆倒傾て只煙屋許殘たるに此人々壞たる縁に居並て月を興ハシて詩句を詠むけるに踏沙被練立

清秋月上長安百尺樓と云詩は昔唐に□□云ける人八月十五夜に月を翫て作れる詩也其を此人々詠むけるに亦故朝綱の文花の微妙なりし事共を云ひ語ける間丑寅方より尼一人出來て問て云く此は誰人の此無來て遊び給ふと答て云く月と見む爲に來れる也亦汝何なる尼と云く故宰相殿に仕へ□人一人なむ于今殘て侍る此殿に男女の仕へ人其員侍しとも皆死畢て已一人今明とも不知て侍る也と道を好む人々の此聞ても思て哀に尼ヲ感して或は泣人も有けり而る間尼の云く抑も殿原の月の長安の百尺の樓に上れりを詠し給つる古へ故宰相殿の月に依て百尺の樓に上るとこそ詠し給し此の不似侍月の何しに樓には可上きと人こそ月を見む爲に樓は上れと云を此人々聞て涙と流して尼を感る事无限抑も尼は何者にて有

一そと問ひ尼己の故宰相殿の物張にてなむ侍りし其れは常に聞し事なれぬ殿原の詠し給ふ時に鬚に思ひ侍る也と云へり人々終夜此尼に談して皆尼に纏頭してなむ曉は返ける此を思ふは朝綱の家風彌よ重く思え云ふ甲斐无き女そら如此に況や朝綱文花思ひ可遣しとなむ語り傳へたる也や

天神御製詩讀示人夢給語第二十八

今昔天神の作らせ給ける詩有けり東行西行雲渺々二月三日遅々を此詩を後代の人翫て詠すと云へとも其讀を心得る人无りけるに□と云人北野の寶前に詣て此詩を詠けるに其夜の夢に氣高く止事无き人來て教て宜はく汝ら此詩をい何に可讀と心得たるを畏て不知る由を答へ申けるに教へて宜はくとさまに行きさうさまに雲はる

くささらさやよひうらくと可讀き也と夢覺て後禮拜してを罷出にける天神は昔より夢の中に如此く詩を示し給ふ事多かりとなむ語り傳へたる也や

藤原資業作詩義忠難語第二十九

今昔藤原資業と云博士有けり鷹司殿の御屏風の色紙形に可被書き詩を其道は達せる博士共は仰せ給て詩を作けるに彼の資業朝臣の詩數に入にけり其比齊信の民部卿大納言と云人有り身の才有て文章に達するは依て仰を承て此詩共を撰ひ被定けるに資業の詩數入たをけるを其時に藤原義忠と云博士有て此れを嫌はしく思けるにや宇治殿の□にて御座けるに義忠申ける様此の資業朝臣の作れる詩は極て異様の詩共也他聲にして平聲に非ざる字共有り難専ら多し然とも此資業の

當職乃受領なるに依て大納言其の饗應有て被入たる也と其時に資業
の□□守にて有ける也民部卿此事を傳へ聞て攀縁を發して此詩共を
皆麗句微妙にして撰ふ所は私无き由を被申けれは宇治殿頗る義忠の
言を不心得思食て義忠を召て何の故有て此の僻事を申て事を壞らむ
と爲るると勘發し被仰ける義忠恐れを成して蟄り居にけり明年の三
月はなむ被免ける而るは義忠或る女房は付て和歌を奉ける

あをやきのいろのいとにてむすひて
うらみをとめて春のくれぬる

と其後指る仰せ无て止にけり此を思ふは義忠も可誇き所有てこそ誇
けめ只民部卿の當時止事无き人なるに私有る思えを不取れとて有け
るにや亦資業も人の誇り有許詩歎の世も不作りけむら此れも只才を挑

ひより出来る事也但義忠の民部卿を放言するの由无き也とそ人云て
義忠を誇けるとあむ語り傳へたるとや

藤原爲時作詩任越前守語第三十

今昔藤原爲時云人有き一條院の御時に式部丞の勞に依て受領に成
らむと申けるは除目の時關國无きに依て不被成りけり其後此の事を
歎て年を隔て直物被行ける日爲時博士には非とも極て文花有る者に
て申文を内侍に付て奉り上げてけり其の申文に此句有り苦學寒夜紅涙
霑襟除日後朝蒼天在眼と内侍此れを奉り上げむと爲るに天皇の其の
時御寢なきて不御覽成にけり而る間御堂關白にて御座けれは直し
物行とせ給はむとて内に參らせ給たりけるに此の爲時此事を奏せさ
せ給けるに天皇申文を不御覽るに依て其御返答无かりけり然れは關

白殿女房に令問給けるに女房申す様爲時の申文を令御覽むとせし時御前御寝なりて不御覽成にき然れ其申文を尋ね出て關白殿天皇に令御覽して給けるよ此句有り然れ關白殿此句微妙よ感せさせ給て殿の御乳母子にて有ける藤原國盛と云人の可成りける越前守を止て俄に此の爲時をなむ被成にける此れ偏に申文句と被感る故也となむ世に爲時を讚めけるとなむ語り傳へたとや

延喜御屏風伊勢御息所讀和歌語第三十一

今昔延喜天皇御子の宮の御著袴の料に御屏風と爲させ給て其色紙形に可書き故に歌讀共よ各和歌讀て奉れと仰せ給ひけれハ皆讀て奉たりけるを小野道風と云手書を以て令書給ければ春の帖よ櫻の花の榮たる所に女車の山路行たる繪を書たる所に當て色紙形有り其を思し

食し落して歌讀共にも不給りければ道風書れ持行くよ其歌なければ天皇此れを御覽して此ハ何かせむと爲る今日に成ては俄に誰ハ此を可讀き可咲所の歌しもなむらむこそ口惜けれと被仰て暫く思食し廻して藤原伊衡と云殿上人の少將よて有けるを召ぬ即ち參ぬ被仰て云く只今伊勢御息所の許よ行て此る事なむ有る此歌讀てとて遣す此御使に伊衡を遣す事ハ此人形ち有様より始て人柄なむ有ける然れハ御息所恥しと思ひぬへき者ハ此なむ有ると思食して撰て遣すなるへし然て此御息所ハ極て物の上手にて有ける大和守藤原忠房と云人の娘也亭子院の天皇の御時に參て有けれハ天皇極く時めき思食して御息所にも被成たる也形ち心とせより始め故有て可咲く微妙りけり和歌を讀む事は其時の躬恒貫之にも不劣りけり其れよ亭子院の法

師に成らせ給て大内山と云所に深く入て行はせ給けれの御息所も世
中冷しく思えて家につくくと長め居たる也けり内渡の事共事一觸
れて思ひ被出て物哀し思ひ居たる間に門の方に前追ふ音す欄姿なる
人入來る誰に有らむと思て見れり伊衡の少將の來れる也けり思ひ
不懸ぬ何事一有らむと思て人を以て令問伊衡の仲を奉て御息所の
家に行て見れり五條渡なる所也庭の木立ち極て木暗くて前裁極く可
咲く殖たり庭の苔砂青み渡たり三月許の事なれり前櫻識く榮え寢殿
の南面に帽額の簾所々破て神さひたり伊衡中門の脇の廊に立て人を
以て内の御使にて伊衡と申す人なむ參たると云せられたり若き侍の男
出來て此方に入らせ給へと云へり寢殿の南面に歩み寄て居たる内に
故ひたる女房の音にて内に入らせ給へを云簾を搔上て見れり母屋に

簾の下したり朽木形の几帳の清氣なる三間許に副て立たり西東三間
許去て四尺の屏風の中馴たる立たり母屋の簾に副て高麗端の墨を敷
て其の上に唐錦の茵敷たを板敷の被蓋たる事鏡の如し影残りなく移
て見ゆ屋の體舊くして神さひたり寄て茵の旁の方一居たれり内より
空薫の香水やゝかに馥しくほのく匂ひ出つ清氣なる女房の袖口共
透たり額つき吉き二三人計簾より透て見ゆ簾の氣色極く故有りて可
咲と耻かしと思へとも簾の許一近く寄て内の仲せ事一候ふ夕さり若
宮の御着袴に屏風して奉るに色紙形に書む料に和歌讀共一歌讀せ
て書せつるを然々の所の思落して歌讀にも不給ければ其所の色紙形
よは可書き歌もなし然れり其歌可讀き躬恒貫之召さすれり各物に行
にけり今日には成にたり亦異人に可云き様なけれり此の歌只今讀

て被遣なむやとなむ仰せ事候ひつると云へり御息所極く驚て此の可
 被仰事の如らむ兼て仰せ有らむよてそら躬恒貫之の讀たらむ様に
 は何ての如らむ増して俄に糸破なれ仰事也思ひ可懸事も非りけりと
 云音鬚に聞ゆ氣はひ氣高く愛敬付て故有り伊衡此を聞に世にの此る
 人も有けりと聞く暫許有れり嚴しき童れ汗衫着たる銚子を取て簾の
 内より居さり出つ怪と思ふ程に早く居たる簾の下より繪可咲く書た
 る扇に蓋を居らて差出たる也けり童の可咲氣にて簾より透て居さり
 出を見る程に遅く見付たる也けり亦女房よせ來て蠻繪に詩たる硯の
 筥の蓋に清氣なる薄様を敷て交菓子を入れて差出たり酒を勸むれば
 蓋を取て有るに童銚子を持て酒を入る多しと云へとも抑へて只入に
 入る我れ酒飲むと知たるなりけりと思ふに可咲然て飲つ蓋を置む

と爲るに不置して度々誣ふ四五度許飲て辛くして蓋を置つ亦打次き
 簾の下より蓋を差出つ辭へとも情无きはとて度々飲む程に酔ぬ女房
 達少將を見れば赤みたる顔付眼見櫻の花の匂合て微妙く見ゆる事无
 限り程も久く成ぬれり紫の薄様に歌を書て結ひて同じ色の薄様を裏
 て女の装束を具して押出したり赤色の重の唐衣地摺の裳濃き袴也物
 の色極て清らに微妙し思ひ不懸ぬ事なと云て取て立ぬ女房共少將
 の出たるを見送て目出入る事无限り門を出て隠るまで見るに後手の
 歩たる姿窈窕に微妙し車の音前音など不聞え成ぬれり極く哀に思え
 て居たりつる茵より移り香媚なり取去け疎し此て内には参れやと
 人を以て見せさせ給ふ殿上口の方に前追音して参れり此に参たりと
 申せり疾々と被仰る道風の筆を濕し儲て御前に候ふ亦可然き上達部

殿上人數御前に候ふ而る間伊衡少將物を被きて殿上の戸許に被物を
は落し置て文を御前に持來て奉る天皇此れを披て御覽するに先づ書
様に微妙しくて道風り書たるに露不劣御息所此く書たり

拾遺春
ちりちらすきりまほしきをふるさとの
はなみてかへるひともあはなむ

天皇此を御覽して目出たからせ給ふ御前に候ふ人々に此れ見よとて
給はせられたれに可咲き音共を以て詠するにいと、歌見て微妙く聞ゆる
事无限り度々詠て後になむ道風書ける然れば御息所尙微妙き歌讀也
となむ語り傳へたるとや

敦忠中納言南殿櫻讀和歌語第三十二

今昔小野宮の大き大臣左大臣よて御座ける時三月の中旬の比公事に

依て内に参り給て陣の座に御座けるに上達部二三人許り参り會て候
はれけるに南殿の御前の櫻の器の大きに神さひて艶ぬの枝も庭まで
差覆て懺く榮て庭に隙無く散り積て風に吹き被立つ、水の浪などの
様に見えけるを大臣艶に懺き物の例に極く榮けと系此る年は无死
者を土御門の中納言の被参よと此れを見せはやと宣ふ程に遙に上
達部の前を追ふ音有り官人を召て此の前誰に被参るを問ひ給ひ
けれに土御門の權中納言の参らせ給ふ也と申けれに大臣極く與有る
事など喜び給ふ程に中納言参て座に居るや遅きと大臣此の花の庭
に散たる様は何の見給ふと有けれに中納言現に懺ふ候ふと申し給ふ
に大臣然らに遅くこそ侍れと有けれに中納言心よ思ひ給ひける様此
大臣の只今の和歌よ極たる人よ御座す其れに墓々しくも无からむ事

を面無く打出てたらむの有らむより極く弊^元あるへし然りて止事
无き人の此を責め給ふ事を冷くて止むも便極^元あるへしと思て袖を搔
疏ひて此なむ申し上げる

拾遺雜傳源公忠朝臣
このもりのとものみやはこ心あらは

この春ばかりあさきよめまな

と大臣此れを聞給て極く讀め給て此の返し更に否不爲と劣たらむに
長き名なるへし然りて増さらむ事ハ可有き事よも非ずをる只舊歌
を思え益さむと思給ひて忠房^四唐へ行くとて讀たりける歌をなむ語
り給ける此の權中納言ハ本院の大臣の在原の北方の腹に生せ給ふる
子也年ハ四十許にて形ち有様美麗^一なむ有ける人柄も吉^四りけれハ
世の思えも花やりにてなむ名をハ敦忠と云ける□□に通けれハ亦

本院の中納言とも云けを和歌を讀む事人ハ勝たりけるに此る歌を讀
出たれハ極く世ハ被讚けりとなむ語り傳へたることや

公任大納言讀屏風和歌語第三十三

今昔一條院の天皇の御時ハ上東門院始めて内に參らせ給ひけるに御
屏風を新しく爲させ給て色紙に書かむ料に歌讀共ハ仰せ給て歌讀て奉
れと有けるに四月に藤の花の懌く榮たる家を繪に書たりける帖を公
任の大納言當て讀み給けるハ既^一其の日に成て人々の歌ハ皆持參た
りけるに此大納言の遅く參り給けれハ使を以て遅き由を關白殿より
度々遣しけるに行成大納言ハ此和歌を可書き人にて疾く參て御屏風
を給はりて可書き由申し給けれハ彌^一立居待たせ給ける程ハ大納言
參り給へれハ歌讀共の墓々^一く歌も不讀出に然りとも此大納言の歌

はよも弊き様の非しと皆人も心慥り思たりけるに御前よ参るや遅
きと殿何に歌は遅きを被仰ければ大納言墓々しくも更に否仕を不
得弊くて奉たらむよ不奉には劣たる事也其中にも歌讀共の系勝れた
る歌共も不候めり其歌共被召て墓々しくも非ぬか被書て候はむに
公任の永くの名に可候しと極く遁れ申し給けれども殿異人の歌の无
くても有なむ其の御歌无くは惣て色紙形不被書まじ也とまめや如
に責め申し給ひければ大納言極く候ふ態のな此度の凡そ誰も々々歌
否不讀出度にこそ候めれ中にも永任をこそ然りとも其歌の心慥く思
給へ候つるに此くさしめせなへと讀て候への系異様に候ふ然れと
此等たに此く讀損ひ候への増て公任は不讀得候も理わりなれば尙免
し可給き也と様々に遁れ申し給へとも殿強に切りに切て責させ給へ

の大納言極く思ひ煩て大歎打して此は長き名かなと打云て懷よを陸
奥紙に書たる歌を取出て殿に奉り給への殿此れを取て御前に披て置
き給ふよ御子の左大臣宇治殿同二條大臣殿より始めて若干の上達部
殿上人然れとも此大納言の无下に故無くは不讀給と心慥く思て除目
の大間殿上は様に皆人押ひらひて見驟くに殿音を高くして讀上給ふ
を聞けり
拾遺雜音
むらさきのくもどそとゆるふちの花
いかなるやそのゑるなるらむ
と若干の人皆此れを聞て胸を扣て極くと讚め嗚けり大納言も人々の
皆極と思たる氣色と見てなむ今を胸の落居ぬると殿に申し給へる此
の大納言は萬の事皆止事无かりける中にも和歌讀む事を自も常に自

歎し給けりとなむ語り傳へたるとや

公任大納言於白川家讀和歌語第三十四

今昔公任大納言春比白川の家に居給ひける時可然に殿上人四五人許
行て花の讎く候へは見に参はる也と云ければ酒など勸めて遊ひける
に大納言此なむ

拾遺雜奇
春きてそ人もとひけるやまさとは

花こそやとのあるむなまをけし

と殿上人共此れを聞て極く目出て讀けれども此れは准るも无かりけ
り亦此大納言父の三條の大き大臣失せ給ひたりけるに九月の中旬の
比月の極く明かりけるは夜更行く程に空を詠めて居たりけるに侍の
方に極て明なる月かなと人の云けるを聞て大納言

詞花雜下

いにへをこふるなみたにくらされて

おほろにみゆるあきの夜の月

となむ讀たりける亦此の大納言九月許に月れ雲隠たりけるを見て讀
ける

後拾遺錄上

すむとてもいくよゆすまじ世中に

くもりあなるあきの夜の月

と亦此乃大納言宰相中將まで有ける時可然き上達部殿上人數具して
遊はむか爲に大井川に行て遊ひけるは紅葉の井關に流れ留たりける
を見て讀ける

後拾遺錄

れちつもるもみちをみれば大井河

るせきに秋はとまるなりけを

と亦此の大納言の御娘は二條殿の御北方よて御座けるよ雪降ける朝
其御許に奉けり

同冬

ふるゆきはとよとよにそつもりける

いつれかたうくなりまさるらむ

と此大納言世中を恨て蟄居たりける時八重菊を見て讀ける

同冬

おこなへてぞくちらさくはやへくは

花のしもとそみわたりける

と亦世中を背く人々多く有ける比大納言此く讀ける

拾遺

れもひいる人もありける世中に

いつといつとてまこすなるらむ

と亦關白殿の大饗行はせ給ける屏風に山里に紅葉見よ人の來たる所

を繪に書たるに此なむ讀ける

後拾遺

山里のもみちみにとヤ同わらもふらむ

ちりはてよこそとふへりけし

と此様に讀て此大納言は極たる和歌の上手にて御座けるとなむ語り
傳へたる也

在原業平中將行東方讀和歌語第三十五

今昔在原業平中將と云人有けり世の□者にてなむ有ける然るに身を
要悪无き者に思ひ成して京には不居しと思ひ取て東の方に可住き所や
有とて行けり本より得意と有ける人一兩人と伴なひて道知れる人も
无くて迷ひ行けを而る間參河の國に八橋と云所に至ぬ其を八橋と云
なる様は河の水出て蜘蛛手也ければ橋を八つ渡けるに依て八橋とは云

ける也其澤の邊に木隱の有ける業平下り居て餉食けるに小河の邊に劇草謔く榮たをけるを見て具したりける人々の云く劇草と云ふ五文字を句の頭毎に居らて旅の心の和歌を讀めと云ければ業平此く讀け

古今

四らころもきつゝなれよ一つまゝあれは

とろくきぬるたひをーそれもふ

と人々此れと聞て哀れに思て泣にけり餉の上に涙落てほとひよけり其を立て眇々と行々て駿河國に至ぬうつの山と云山に入らむと爲るよ我如入らむと爲る道の糸暗し心細き事无限り給絡石鷄冠木繁て物哀れ也此くすゝろなる事を見る事と思ふ程に一人の修行の僧會たり此れを見れば京よて見知たる人也けり僧業平を見て奇異に思て云く此る

道を何て御座とと業平其下居て京に其人の許に文を書て付く

する如なるうつの山へのうつゝにも

ゆめにも人にあそぬなりけり

と其より行々き富士の山を見れり五月は晦日に雪糸高く降たるに白く見ゆ其れを見て業平此く讀けり

ときあらぬ山のふりのねいつとて如

如のこまたらよゆきのふるらむ

と其の山の此に譬へは比叡山を甘重上たる許の山也なりはらほむりの様にそ有る尙行々て武藏國と下總國との中に大きな河有り其を角田河と云其河邊に打羣居て思遣れり无限り遠く來にける如など佗思へるに渡守早く船に乗れ日暮れぬと云へり乗て渡らむと爲る程よ

皆人京に思ふ人无きにしも非て侘思けり而る間水の上に鳴の大死さ
有る白き鳥の嘴と足とは赤死遊つゝ魚を食ふ京には更に不見の鳥な
れの人も不見知渡子守に彼れ何鳥と云ふと問へは渡子守彼れをは都
鳥と云と云ければ業平此を聞て此なむ讀ける

古今來 なにこれとよいさことよはむ都どり
わかれもふひとはありやなしやと

船の人皆此れを聞て舉てなむ泣ける此の業平は此様よして和歌を微
妙く讀けるとなむ語り傳へたるとや

業平於右近馬場見女讀和歌語第三十六

今昔右近の馬場に五月六日弓行ひけるに在原業平と云人中將にて有
ければ大臣屋に着たりけるに女車大臣屋近く立て物見る有り風の少

し吹けるに下簾の被吹上たりけるより女の顔の不愠と見たりける
は業平の中將小舎人童を以て此云遣たりけり

古今應一 みそもあらすみもせね人のこひこく
あやなくけふやなめくらさむ

と女返し
同 いるをらすあにあやなくわきていはん
れもひのみこそしるへなりけれ

となむ有ける亦此業平中將惟高の親王と申ける人の山崎に居給へり
ける所に中將狩せむか爲に行たりけるに天の河原と云所に下り居て
酒など飲けるに親王天の河原と云心と讀て蓋を差せと宣ければ業平
中將此くなむ

古今旅

かりくらしたなはたつめにやとりらむ

あまのわらわはきはさけけるり同

と御子の返し否し不給りければ御共に有ける紀の有常と云ける人なむ此くなむ

同旅

ひとせにひとたひさまはきみまては

やどやす人もあらじとそれゆふ

と其後御子返り給て中將と終夜酒飲み物語をこし給けるに十一二日の夜の月の隠れなむとけけるに御子酔て入給ひなむと爲れば業平中將此くあむ

古今雜上

あぢなくよまたきも月のわくるよか

山のはにけていれすもあらなむ

と聞えたをければ御子不寝給て曙し給てけり中將此様に参つ遊ひけるに御子不思懸出家し給て小野と云所に御座けるに業平の中將見奉らむとて二月許に参たるに雪糸深く降て徒然氣なるを見て中將此なむ

同雜下

わすれてはゆめをこそそれゆふたもひきや

ゆきふみわけてきみをみむとい

と云てを泣く返にける此の中將は平城天皇の皇子阿保親王の子也ければ品も糸止事无き人也而るよ世を背て心を澄して此様に行て和歌をを微妙く有けるとなむ語り傳へたるとや

藤原實方朝臣於陸奥國讀和歌語第三十七

今昔藤原實方朝臣と云人有けり小一條の大將濟時の大納言と云ける

人の子也一條院の御時に左近中將として□の殿上人にて有けるに不
思懸陸奥守に成て其國に下て有けるに右近中將源宣方朝臣と云ける
人と□□の子也實方と共に禁中に有ける時諸の事を隔無く云通はじ
て極たる得意にて有けるに泣々實方に別れて陸奥國に下にけるに彼
の國より實方中將宣方中將の許に此なむ云遣たりける

後拾遺雜五

やすらひてたもひたちにとあつまぢに

ありけるものをいふりのせき

となむ云ける亦道信中將と云人有けり其れも此の實方中將と无限り
得意にて有けるよ九月許に紅葉見に諸共に行かむと契を成して後彼
の道信中將不思懸失にければ實方中將无限り哀れに思て泣々獨言に
此なむ

同哀 みむといひ一人は、いなくさゆにを

ひとりつゆけさあきのはなかな

となむ云て戀ひ悲みけり亦此の實方中將愛しける幼き子にたくれた
りける比无限り戀悲て寝たりける夜の夢に其兒の見えたりければ驚
き覺て後此なむ

同哀

うたゝねのこのよのゆめのはななきよ

さめぬや如てのいのちともかな

となむ云て泣く戀ひ悲ひける此中將は此く和歌を讀む方なむ極たり
ける而る間陸奥守に成る其國に下て三年と云に墓无く失はければ哀
れなる事實に无限りして止にけり其の子の朝元元と云ひ人も和歌の
上手にてなむ有けるとなむ語り傳へたるとや

藤原道信朝臣送父讀和歌語第三十八

今昔左近中將に藤原道信と云人有けり法住寺の爲光大臣の子也一條院の御時の殿上人也形ち有様より始て心はへ糸可咲て和歌をな一微妙く讀ける未た若かりける時に父の大臣失給ひにければ歎れ悲むと云へとも甲斐无くして墓无く過て亦の年よ成たれば哀の盡せぬ物なれとも限有れば服除とて道信中將此を讀ける

拾遺哀

あきりあれはけふぬきすてつふち衣

はてなきものいなまたなりけり

と云てを泣ける亦此の中將殿上にして數の人々有て世中の墓无き事共を云て牽牛子の花を見ると云心を中將此を

同哀

あさあほとなにのあなれと思ひけむ

人をも花はさこそみるらめ

と亦此の中將屏風の繪に山野に梅の花榮たる所に女の只一人有る屋の糸幽なる所を此を讀ける

とる人もなれば山さとの花のいろを

中々かせそをいむへらなる

と亦此の中將九月許に或る女の許へ行たりける祖を隠しければ有り乍ら不會して返て亦の日此を云ひ遣たりける

よそなれとうつろふ花のさくのはな

なにへたつらむやどのあきより

と亦此の中將菊の盛也ける比山郷なる所に行かむとて人を以て云ひ遣ける

わやどのゆきねの菊の花さゆり

またうつろはぬほとにきてみよ

と亦此の中將八月許に橋橋に知たりける所所へ行たりける所月無の極く明くて水水移たりけるを見て此なむ讀ける

桂川月のひかりに水まさり

秋の夜ふゆくなりけるゆな

と其より返て三日許有て共に彼の橋橋にて月を見し人の許に此なむ云ひ遣ける

玉葉雜一清原元輔
れもひいつや人めなゆらも山さとの

月と水との秋のゆふくれ

と亦此の中將兄弟の公信朝臣と共に壺坂と云所に行たりけるに道に

蘭の榮たりけるを見て此なむ讀ける

ふゆオイのきておとろへよけるふちはかま

にこさのゆりてありをこたへよ

と亦此の中將極樂寺の邊に物見に行ゆむと契ける人の不行成にければ此なむ讀て遣ける

ふくゆせのたよりにゆはさきてけむ

けふもちてキリこやまのゆみちは

と亦此の中將齋然法橋と云人の唐へ渡らむとて此の中將の許に來て菊の花を見て亦何の秋秋可會さと云けるを聞て中將此なむ讀ける

あきふゆとさみたにきくに志をれけり

この花のゆちなにをたのまむ

と亦此の中將或所に大破子と云物を一奉けるに子日一たる所に此
く書付たり

きみ四へむ世々の子日を四そふれは
四に四くまつのれひ四はるまで

と亦此の中將女院の長谷に參らせ給て出給ひけるよ未た夜深四りけ
れは暫く御座ける間數人々有明の月の極く見ゆると詠めけるに此の
中將此あむ讀ける

そむけともなやよろつよをありあけの
月のひ四りそはるけかりける

と人々極く此れを讀けり亦此の中將或る女の内に候ける四内より出
てむ時は必ず告げむと契て出けるよ不知て出にければ亦乃日の朝此

く讀て遣たりける

後拾遺雜二

ワタル同

あまのはらゆる四よてらす月たにも

レ同

いつるは人にいらせこそすれ

と亦此の中將藤原爲頼朝臣の遠江守に成て其國に下けるに或る所よ
り扇を遣けるよ此中將行き會て此なむ讀て遣ける

同別

テ同

別れちのよとせの春のはること

花のみやこをれもひれこせよ

と亦此の中將或る人の遠き田舎へ下けるに此く讀て遣ける

同別

たれ四世もわりよもしらぬ世中よ

カ同

まつほといりにあらんとすらむ

と亦此の中將藤原相如朝臣の出雲守よ成て其國に下けるに此なむ遣

ける

あゆましてゆくわゆるをたよりあらは
いかにとたにもとひにおこせよ

と亦此の中將□□の國範□臣の帯を借借ッて返し遣けるに此なむ讀て
遣ける

拾遺雜一元輔同ヌヒ

ゆくさきのこのふくさにもなるやとて

ふゆのかたみをおむとをもふ

と亦此中將屏風繪に遙無ッし沖に出たる釣船を書たる所を見て此なむ讀
ける

いつかたをさとしてゆくらむねほつかな
はるかにみゆるあまのつりふね

と亦同じ所に霧の立隠したるに旅人の行たる四字無ッと書たる所を見て此な
む讀ける

あさほらけもみちのゆくを秋死りの
たぬさきにをみるへりける

と亦此中將人の繪を遣せて此御覽せよと云たるを山郷の心細氣なる
水など流れて物思たる男の居たる所を書たるを見て此なむ書付て返
し遣ける

なめれくる水にかけみむ人しれす
ものねもふ人のやはやはこと

繪の主此を見て極クソクかり讀けるとなむ語り傳へたるとや
藤原義孝朝臣死後讀和歌語第三十九

今昔右近少將藤原義孝と云人有けり此れの一條の攝政殿の御子也形
 ち有様より始めて心へ身の才皆人に勝れてなむ有ける亦道心なむ深
 りりけるよ糸若くして失ふけれの親き人々歎き悲けれとも甲斐無く
 て止まけり而るよ失て後十月許を経て賀縁と云僧の夢よ少將極く心
 地吉氣にて笛を吹と見る程に只口を鳴す無ッになむ有ける賀縁此を見て
 云く母乃此許り戀給ふを何よ此く心地吉氣てッには御座するそと云けれ
 の少將答ふる事ハ无くて此てッなむ讀ける
後拾遺表
 しく此上同にはちくさの花そちりまりふ
 なにふささとの袖下同ぬらすらむ
 と賀縁覺驚て後ち泣ける亦明る年の秋少將の御妹の夢に少將妹無ッに會
 て此なむ讀ける

同

きてなれしころものそてもかわかぬに
 わかれしあきになりよけるかな

と妹覺驚て後なむ極く泣給ひける亦少將未だ煩ける時妹の女御少將
 未だ失たりとも不知て經を讀奉むとて云ける程に程无く失にければ
 其後忘れて其身を葬てければ其夜母の御夢に此なむ

同

一ははかりちきりしもれをわたり川
 回へるほとよそわするへしやば

と母驚き覺て後泣き迷ひ給ひけを然れば和歌讀む人の失て後に讀た
 る歌も此く微妙き也となむ語り傳へたるとや

圖融院御葬送夜朝光卿行成卿讀和歌語第四十

今昔圓融院の法皇失せ給ひて紫野よ御葬送有けるよ一とせ此に御子

日に出させ給へをし事かなど思ひ出て人々哀れに歎き悲けるに關院左
大將朝光大納言此なむ讀ける

後拾遺哀

むらさきのくものかけても思きや

はるの四すみになてみむとい

と亦行成大納言此なむ讀ける

同哀

たくれーとつねのみゆきにいそきーよハ同

フ同

煙にそそぬたひの四な一さ

と此なむ讀けるも哀也となむ語り傳へたるとや

一條院失給後上東門院讀和歌語第四十一

六十六代

六十八代

今昔一條院失させ給て後々一條院の幼く御座ける時瞿麥の花の有
けるを何心もまじまさす取らせ給たをけるを母后上東門院見給て此

なむ讀給ひける

同哀

みるまゝにつゆをこほるゝたくれにし

こゝろもしらぬなてしこのはな

と此れを聞く人皆泣けり亦一條院の未た位に御座ける時皇后失せ給

無々

ひけるに其後御帳の紐に結び被付たる文有り人此を見付たる内に
も御覽させよ四はよて有ければ御覽せさせけるに和歌二首三々を書き被

付たり

後拾遺哀

よもす四らちきりーことをわすれは

こひんなみたの色をゆわーき

同哀

ある人もなきわ四れちにいまはとて

こゝろほそくもいそきたつツッかな

と天皇此を御覽して无限り戀悲ませ給ひけり此れを聞く世の人も不泣は無かりけりとなむ語り傳へたるそや

朱雀院女御失給後女房讀和歌語第四十二

今昔朱雀院の女御と申すは小野宮の太政大臣の御娘也其の女御墓无く失せ給ひにけり而るに其の女御の御許に候ひける女房有けり名をは助と云ける形ち有様より始めて心はへ可咲かりけれの女御此れを睦しき者よして哀れに思たりけれの女房も妬嫉妬く思ひ通はして過ける程に常陸守の妻に成て其國に下よけり心苦しく思ひけれとも強に□の倡けれの國に下ても女御を戀ひ奉けるよ彼の女御に御覽せさせむとて嚴き貝共を捨て箱一具に入れて持上たりけるに女御失せ給ひにけりと聞て泣悲んと云への愚也や然れとも甲斐无くして其貝一箱

を此れ御誦經行にせさせ給へとて大き大臣よ奉たりけるに貝の中よ助此なむ書入たりける

ひろひれきしきみもなきさのうつせひ

いまはいつれのうらにすてまじヨラヌ

と大き大臣此れを見給て涙に噎返て泣々御返し此なむ

たまくしけうらみうつせるうつせひ

きみわしたみユとひろふはわりそ

と實に其比の此れを聞て不泣人无かりけりとなむ語り傳へたるそや

土佐守紀貫之子死讀和歌語第四十三

今昔紀貫之と云歌讀有けり土佐守に成て其國に下て有ける程に任畢り年七つ八つ許有ける男子の形ち嚴かりければ極く悲く愛し思ける

か日来煩る墓无くして失せにければ賞之无限り此を歎き泣き迷て病付許思焦ける程に月來に成にけれの任の畢ぬ此てのみ可有き事にも非ねは上なむと云程に彼兒の此にて此彼遊ひと事なと思ひ被出て極く悲く思ひければ柱に此く書付けり

みやこへと思ふ心のわひしき

かへらぬ人のあればなりけり

上て後も其の悲れ心不失て有ける其の館の柱に書付たりける歌の今ニテまで不失て有けりとなむ語り傳へたるとや

安倍仲磨於唐讀和歌語第四十四

今昔安倍仲磨と云人有けり遣唐使として物を令習むいか爲に彼國に渡けり數の年を経て否返り不來りけるに亦此國より□□と云ふ人遣唐

使として行たりけるか返り來けるを伴なひて返りなむとて明州と云所の海の邊にて彼の國の人餞とけるに夜に成て月の極く明かりけると見て墓无死事に付ても此國のの事思ひ被出ッて戀く悲しく思ひければ此の國の方を詠めて此なむ讀ける

古今あまのいらふりさけみればりすかなる

みかさの山にいてとつき

と云てなむ泣ける此れは仲丸此國に返て語りけるを聞て語り傳へたことや

小野篁被流隱岐國時讀和歌語第四十五

今昔小野篁と云人有けりテ事有三字無て隱岐國に被流ける時船に乗て出立つとて京に知たる人の許に此く讀て遣ける

古今來

わたのいらやをしまひけてこき出ぬと

ひきよはつけよあまのつりふね

と明石と云所に行て其夜宿て九月許その事也けれの明鬚に不被寝て

詠め居たるに船の行くか島隠れ爲ると見て哀れと思て此なむ讀ける

同水讀人不知

はのく〜とあひのうらのあさきりに

島かくれ行舟をしそをもふ

と云てを泣ける此れは笠返て語るを聞て語り傳へたことや

於河原院歌讀共來讀和歌第四十六

今昔河原院に宇多院住ませ給けるに失させ給ひけれの住む人も无く

て院の内荒たりけるを紀貫之土佐國より上て行て見けるに哀也けれ

の讀ける

古今來

きみまきて煙たえにし鹽のまの

うらさひしくもみえわたるのな

と此院の陸奥國の鹽竈の様を造て潮の水を湛へ汲み入れたりけれの

此く讀なるへし其後此の院と寺に成してけり然て安法君と云僧を住

ける其の僧冬の夜月の極く明かりけるに此なむ讀ける

あまのいらそこさへさえやわたるらむ

こほりとみゆるふゆのよのつき

と西の臺の西面に昔の松の大なる有けり其の間に歌讀共安法君の房

に來て歌を讀けり古曾部の入道能因

をしふれいやはらに松のたひにけり

子日しつへさねやのうへな

と□□の善寺

さと人のくむたよ今ひなりるへー

いたろのしみつとくさるにけり

と源道濟

拾遺雜上

ゆくれはのしるまのかりにのころへた

松さへいたくたいにける如な

と其後此院彌よ荒れ増て其の松の木も一とせ風に倒れし人の人々哀
れになむ云ける其院今の宅共ニテ歌許小家成ぬとなむ語り傳へたるとや

伊勢御息所幼時讀和歌語第四十七

今昔伊勢の御息所の未た御息所にも不成て七條の後の御許に候ひけ
る比枇杷左大臣未た若くして少將にて有ける程に極く忍て通ひ給ひ

けるを忍ふと爲れとも人自然ら鬚に其の氣色を見てけり其後少將通

ひ不給して音无りりければ此く讀てなむ遣たりける伊勢

古今懸五

人しれす絶なましわのわひつゝも

なき名をとたにいのまじものを

を少將此れを見て哀れに思給ひけむ返てなむ此の度の現はれて極く
思て棲給けるとや

參河守大江定基送來讀和歌第四十八

今昔大江定基朝臣參河守にて有ける時世中辛くして露食物无りけ
る比五月の霖雨しける程女の鏡を賣りて定基朝臣の家よ來たりけれ
は取入れて見るに五寸許なる押覆ひなる張篋の沃懸地に黄よ詩るを
陸奥紙の覆さに裹て有り開て見れは鏡の篋の内に薄様を引破て可咲

氣なる手と以て此く書たり

拾遺上 讀人不知

けふまでとみるは涙のますかゝみ

ニシ同なれぬるゆけを人にかたるな

と定基朝臣此れを見て道心を發たる比にて極く泣て米十石を車に入れて鏡をい賣る人に返し取せて車を女に副へてを遣ける歌の返しを鏡の筥に入れてを遣たりけれども其の返歌をい不語ら其の車に副へて遣たりける雑色の返て語けるは五條油の小路邊に荒たる檜皮屋の内にあむ下し置つるとそ云ける誰か家とは不云ぬなるへいとあむ語り傳へたるとや

七月十五日立盆女讀和歌語第四十九

今昔七月十五日の□盆の日極く貧ゆりける女の祖の爲に食を備ふる

よ不堪して一つ着たりける薄色の綾の衣の表を解て^盆の^盆に入れて蓮の葉を上よ覆て愛□寺に持參て伏禮て泣て去にけり其後人恠むて寄て此れを見れは蓮の葉に此く書たりけり

たてまつるとちすろうへの露のりり

これをあわれにみよのそとけり

と人々此れを見て皆哀ゆりけり其人と云事は不知て止にけりとなむ語り傳へたるとや

筑前守源道濟侍妻最後讀和歌死語第五十

今昔筑前守源道濟と云人有けり和歌を讀む事なむ極めたりける其人其國よ下て有ける間よ待也ける男年來棲ける妻を京より具して守の共に國に下て有けるり其國よ有ける女を語ひける程よ其女に心移り

畢にけれのや四て其訖を妻にして此の本の妻をい忘りけり本の妻の
旅の空にて可爲き方も思ひさりければ夫に云ける様本の如くは我れ
と棲給へとい更に不思ひ只自然ら人の京に上むよ云付て我を京へ送
れと夫更に耳にも不聞入して畢には女の遣す消息をたに不見りけり
本の妻をい居たりける屋に居えて男の今の妻の許に居て惣て本の妻
の有無をも不知りければ本の妻思歎て有る程に不思懸病付にけり
只有つるまよ打憑て遙に來たる夫の去て物食らむ事も不知り此様
彼様に構つゝ過けるに増て重き病と受にけれの思ひ遣る方無く哀れ
に心細く思て臥たるに京より付て來たりける女の童只一人を有け
る此く病して術无き由を男の許に云ひ遣たせけれとも聞も不入れ日
來を経て病既に限に成にければ女哀れに知る人も无き旅の空にて死

なむする事を歎き悲て物も不思え心地にわななく文を書て此の
女の童を以て男の許に遣けるを守の館に女の童の持行たりけるを男
取て打見て返事も不遣して然聞死つと許云て只云事も无かりけれの
女の童の思繚て返にけり而る間此の男の同僚也ける侍打棄て置たり
ける此の妻の文を何とも無く取て見けれの此く書たり
後拾遺雜三讀人不知
とへりしなくよもあらぬつゆのみを
しん志もことのはにや如しと
此の侍此れを見て情け有ける者よて哀に思ふ事无限り實に奇異なり
ける者の心如なと思て女の糸惜き餘りに此の事守に聞せてむと思て
此の文を守に忍て見せけれの守此れを見て男を召て此の何なる事を
と問ければ男否不隠して事の有様を委く語けるを守聞て云く汝は心

疎く人にも非りける者の心かなとて彼妻の許に人を遣て尋ねけれハ
 女の文を遣けるまゝに女の童をも不待付すて失にけり使返て其由を
 守に云ければ守情有ける人よて无限哀あをて先つ此の夫の侍を召て
 我れ汝を年來系惜思て仕ける事こそ无限り悔しけれ汝ハ人にも非り
 ける者の心を我れ近くて見事なむ否有ままきと預てけ沙汰せさせてけ
 る事共皆止め行宿ぬる所々皆追出にして館の使を以て國の間ハ追出し
 てけり然て死たる妻の家ハ人を遣て不見苦様に直く隠させなとして
 僧など籠めて後の態まであむ繚りせける夫の侍ハ今の妻許にも不令
 寄りけれハ可爲き方も无く多人の京に上ける船に付て一塵の貯へも
 死てなむ京に上しける情の心无き者ハ心から此あむ有ける守ハ慈悲
 有て物れ心とも知和とて歌をも讀ける人にて此く人をも哀けるとなむ

語り傳へたること

大江匡衡妻赤染讀和歌語第五十一

今昔大江匡衡の妻ハ赤染の時望と云ける人の娘也其の腹に舉周をは
 産ませたる也其ハ舉周勢長して文章の道に止事无りければ公に仕
 りて遂ハ和泉守に成りけり其國に下けるハ母の赤染をも具して行た
 りけるに舉周不思懸身に病を受けて日來煩けるハ重く成にければ母の
 赤染歎き悲て思ひ遣る方无りければ住吉明神に御弊を令奉て舉周
 の病を祈けるに其の御幣の串を書付て奉たりける

詞花集下

イノル同 四ハらむとをもふ命ををしらて

コ同 さてもわかれんはとそをなして

と其の夜遂ハ愈にけり亦此の舉周ハ官望ける時に母ハ赤染鷹司殿に

此なむ讀て奉たりける

ねもへきとわいらの雪をうちらひ

死えぬさきにといそく心を

と御堂此歌を御覽して極く哀おらせ給て此く和泉守に成させ給へる也けり亦此の赤染夫の匡衡の稻荷の禰宜の娘を語ひて愛し思ひける間赤染の許に久く不來りければ赤染此なむ讀て稻荷の禰宜の家匡衡の有ける時に遣ける

わやどの松のしらもなかりけり

すきむらならぬつねきなま

と匡衡此れを見て恥おしとや思ひけむ赤染の許に返てなむ棲て稻荷の禰宜の許に不通の成りけりとなむ語り傳へたるとや

大江匡衡和琴讀和歌語第五十二

今昔式部大夫大江匡衡と云人有死學生よて有ける時閑院の才の有れども長け高くて指肩にて見苦かおけるを云咲けるに匡衡を呼て女房共和琴と差出して萬の事知り給へるなれに此れを彈き給らむ此れ彈給へ聞かむと云ければ匡衡其の答へをい不云て此なむ讀懸ける

後拾遺雜二

あふさりの關のあなたもまたみね

あつまのこともしられさりけり

と女房達此れを□□其の返しを否不爲ましかりけれの否不咲て搔き靜て獨立ちに皆立て去りけり亦此の匡衡望申ける時に否不成て歎ける比殿上人數大井河に行て船に乗て差し上り差し下り行て遊つゝ人々歌讀けるに此匡衡も人々に被倡て行たりければ匡衡此なむ讀ける

後拾遺雜三

何舟にのりて心のゆくときは

とつめる身ともたもはさりけりホエヌカト同

人々此れを讚め感しける亦此の匡衡實方朝臣の陸奥守よ成て彼國に
下て有ける時よ匡衡此なむ讀て遣ける

同雜五

都よいたれを如君の思ひつる

みやこの人のきみをこふめり

と實方朝臣此を見て定て返と有けむ然れとも其れを語り不傳へ此の
匡衡の文章の道極たりけるに亦和歌をなむ此微妙く讀けるとなむ語
り傳へたるとや

祭主大中臣輔親郭公讀和歌語第五十三

今昔御堂の大納言よて一條殿に住ませ給ひける時四月の朔比日漸く

暮れ方に成けるに男共を召して御隔子參れと被仰けれ祭主の三位
輔親り勘解由の判官にて有ける如參て御簾の内に入て御隔子を下す
程に南面の木末に珍く郭公の一音鳴て過けれ殿の此れを聞食て輔
親の此の鳴音を聞くやと被仰けるよ輔親御隔子を參りさして突居
て承へると申ければ殿然らは遅きと被仰けるよ輔親此なむ申ける

拾遺雜春

足引の山ほととぎす里なれて

たそぬれときになのりすらも

と殿此れを聞食て極く讚させ給て表に奉たりける紅の御衣一つを取
て打被させ給ひつれの輔親給りて臥禮て御隔子と參り畢て御衣を
肩に懸て侍に出たりけれ侍共これを見て此れは何なる事と問け
れは輔親有つる様を語けるに侍共皆聞て極く讚め嗚けり亦此の輔親

日來乘て行ける牛を失て求め煩ひける程に知たりける女の行き絶にける許し其の牛入たりければ女の許より牛を引せて疎と見し心に増けりと云ひ遣たりければ牛をは得る其の返事に輔親此を云遣ける

後給書雜二

かすならぬ人をのりひの心にて

ラナム同

うとともゝのをたもとさらむや

と亦此輔親橋なりける所に伴とする人々數行て遊けるし和歌など讀て亦來らむを云て後し其橋には不行して月の輪と云所に人々行き會て橋を改めて來たる由を讀けるに輔親此を讀ける

同雜四

さきの日にりつらのやとをみしゆゑは

くへき

けふ月のわにきたるなりけり

と人々此れを極く感しけり此の輔親の能宣と云ける人の子なり彼の能宣も微妙き歌讀にてありければ相續て此の輔親も此く歌を讀むなりけり此れをは伊勢の祭主し成傳へる孫なりと云む語り傳へたるや

陽成院之御子元良親王讀和歌語第五十四

今昔陽成院の御子に元良親王と申し人御座けり極き好色よて有ければ世に有る女の美麗也と聞ゆるに會たるにも未だ不會にも常に文を遣るを以て業とけける而る間其時に枇杷の左大臣の御許に童にて仕ひ給ひける若き者有けり名をは岩楊と云ける形ち有様美麗にて心へ可咲かをければ彼方此方の人此れを聞て歎に云はせければ心堅くして不聞ける程し□□と云人強し心を盡して假借しければ

難辭くして會にけり其後の男難去く思て大臣の家の局より來通ひけるを彼の元良親王此れを不知して彼の女の美麗なる由を聞きなれて度々云いせけるに男有とは不云いて強顔返事をたに不爲りければ親王此なむ云ひ遣り給ひける

續古今傳三

を不そらにーめゆふよりもはかなさひ

つれなき人をたのむなりけり

と女の返し

いはせ山よのひとゆえによふことり

よいふとさけいみをはなれぬ

となむ此の親王遂に會りとも不聞えとあむ語り傳へたることや

大隅國郡司讀和歌語第五十五

今昔大隅の守□□と云者有けり其の國に下て政始め行ける間郡の司四度け无き事共有ければ速に召し遣て誠めむと云て使を遣つ前々此様に四度け无き事有る時には罪の輕重に隨て誠むる事常の例也其れに一度にも非ず度々四け度无き事有ければ此れは重く誠めむとて召也けり即ち將參たる由使云ければ前々誠むる様を一臥せて尻頭に上り可括き人可打き様など儲て待つに人二人して引張て將來たり見れり年老たる翁の頭に末黒髪交を皆白髪なり此を見し打せむの糸惜く思ゆれば忽に憐の心出來て何なる事に付て此れを免てむ事と思ふに可事付き方も无一誤共を片端より問に只老を高家にして答へ居たり守此れを見るに打せむの糸惜ければ此れ何にして免さむと思て思ひ廻すに无ければ守思續て云く汝の極き盗人のな但し汝ち

和歌の讀てむやと問に翁墓々しくは非すとも仕てむと答ふれば守い
て然らぬ讀めと云に翁臆も程無くわななき音を捧て此なむ云

拾遺雜下オヒハテ、雪ノ山ヲハイタ、ケト同
としとへてゆらに雪のつもれとも

ル同
しもとみるこそみのひゑにけれ

と守此れを聞て極く感じ哀て免し遣ふける然れば云ふ甲斐无き下臈
の田舎人の中にも此く歌讀む者も有る也けり努々不可蔑となむ語り
傳へたるとや

播磨國郡司家女讀和歌語第五十六

今昔高階の爲家朝臣の播磨守にて有ける時指せる事无き侍有けを名
の不知ら字とを佐太とを云ける守も名をい不呼て佐太とを呼ひける
所サシタルコト字拾の无カをけれとも年來□□らて被仕ければ賤の郡の收納と云事に

宛て有ければ喜無ひて其郡に行て郡司の宿に宿て可成き物の沙汰など
して四五日許有て館に返りけり其れに此の郡司の家ひまに京より淫たる
女の人に勾引されて來たりけるを郡司妻夫此れを哀むて養ひて置て
物縫せなどに仕ひければ然様の事なども月无うらす有ければ糸惜く
して家に有けるに此の佐太の館に返りたりけるに従者の云ける様彼
の郡司の家に女房と云者の形ち美しく髪長き候つるそと佐太此れを
聞て和男の其こに有し時には不告して此にて云こそ慥慥けれと腹立け
れは男其の御座つる傍に立切懸の候つるを隔てこそ候つれば知らせ
給ふらむことを思ひ候つれと云へは佐太彼の郡へ暫く不行と思ひつ
れと疾く行て彼の女見むと思し暇申して程なく行にけり郡司の家
行着けるまゝに本より見たらむ女そら疎カらむ程カ然カやの可有カき従

者の爲と様^{セツ}の居たりける所に押入て責けれとも女隔る事有り後に聞えむなと云て強に辭ひて云事にも不隨りけれ佐太喚て其と出るまゝに着たる賤の水早の綻の絶たりけるを脱て切懸より投越して高や^四に此の綻縫て遣せよと云ければ程無く投返と遣せたりければ佐太物縫して居たりと聞なへに疾く縫て遣せたる^四なと慮ら^四なる音して讚めて取て見るに綻をは不縫して陸奥紙の破の馥とさに文を書て綻の許に結付て有り佐太恠一と思て解て披て見れ^ハ此く書たり

われ^四みいたけのはや一にあらねとも

さた^四ころもをぬき^四くる^四な

と佐太此れを見まゝに心慄く哀也なと思はむ事こそ難^四らめ見るまゝに大き^一喚て云く目盲たる女^四な綻縫に遣たれば綻の絶たる所を

たに否不見て何を佐太ふりの用の佐太と云か賤りるへさか忝も守殿たに未^ハ年來名不召何そ私女の佐太^四と云らむと此の女に物縫はせ^ハと云て奇異き所をさ^ハ何せむなと罵ければ女此れを聞て泣にけり

佐太は喚て郡司と叫ひ出て愁へ申して事に宛てむと云ひ聞せければ郡司恐^テち怖れて由死き人を哀とて置て其の徳に守殿の勘當蒙^無なん^トすと云て佗迷ひけり女も爲方無く佗一と思ひけり佐太の喚々る館に返て侍にて不安ら事也不思ぬ女に悲く佐太ふり被爲たり此れ^ハ御館の名立にも有と云て喚るを同僚の侍共此れを聞く^ハ心得^不さりければ何なる事を被爲て此^ハ云そと問ひければ佐太此様の事^ハ誰も同一身の上なれば守殿^一申し可給き也と云て有ま^一語れば然てと云て咲ふ者も有り憐む者も有り女をは皆糸惜^四りけを而る間守此の事を傳へ

聞て佐太を前よ召て問ければ佐太我の愁へ成たりと思ひ喜て事々く延ひ騰りつゝ申ければ守吉く聞て後云く汝の人にも非ず不覺人こそ有けれ此くは不^レ思てこそ年來の仕つれとて永く追てけり其の女をは哀かりて着物など取返^セける佐太心から主に被^レ迫れて郡をも被止にければ其の事とも无くして京に上にけり郡司の事も宛りぬと思けるに此く聞て極く喜ひなどしけりと語り傳へたるとや

藤原惟規讀和歌被免語第五十七

今昔大齋院と申すも邑上天皇の御子に御座す和歌をなむ微妙く讀せ給ける其の齋院に御座ける時藤原惟規と云人當職の藏人にて有ける時に彼の齋院に候ける女房に忍て物云はむとて夜々其の局に行たりけるに齋院の侍共惟規局よ入ぬと見て恠かりて何なる人ぞと問ひ尋

けるに隠れ初にければ否誰とも不云て有けると御門共を閉てければ否不出て有けるに其の語ひける女房思ひ侘て院に此る事なむ候ふと申ければ御門を開て出しけるに惟規出とて此なむ云ける

金葉雜上
かみかさのたのまろとのにあらねとも

なのりをせぬは人とかめけり

と後に齋院此れを自然ら聞食して哀からせ給ひて木の丸殿と云事は我れこそ聞し事なとを被^レ仰ける彼の惟規の孫は盛房と云者の傳へ聞て語りも也彼の惟規の極く和歌の上手にてなむ有けりとなむ語り傳へたるとや

全書附錄卷第十四

一編 齋堂版

明治十五年八月二十五日出版御届

定價金三拾錢

出版人

東京府平民
近藤圭造
深川區富岡門
前町七十番地

發兌出版所

東京深川公園内
近藤活版所

東京發兌

丸家善七
吉川半七

取次人

芝區濱松町壹丁目十五番地
志賀二郎

